

大学女性教員の 退職後の生き方

インタビュー調査報告書

2013年9月



登谷美穂子/横田綏子

はじめに

定年が視野に入り出した頃から、退職後はどう過ごそうかと考え始めていました。女性の平均寿命は 86 歳、65 歳で退職するなら約 20 年あります。しかも、退職後は仕事から解放されるのですから、24 時間すべてが自分の時間になります。社会的には、老後の生き方を考え直す時期にきているに違いないのですが、それはさておいて、この時間をどのように使ってどう生きるかは、何も準備をしてこなかった私にとっては大きな課題でした。考え得る生き方としては、初心に帰って落ち着いて研究をするのも魅力的、あるいは若い頃からやりたかったことに着手してもいいな、などいろいろ思いつきます。しかし、退職後の生活を考えると、体力や能力がだんだん下降線をたどることも考慮に入れなければならないだろうし、配偶者や身の回りの人達の健康状態も大事なファクターに違いないなど、思考が発散します。

そこで、ふと気づいたのが、他の方はどう暮らしておられるのだろうかということでした。同じ大学に所属していた方でも、一度退職されるとなかなかお会いする機会がありません。風の便りにその消息を聞いて、安心したり心配したりという状況です。

近年は女性研究者が増えてきましたが、定年を迎える年代の女性教員はまだまだ数少ない存在です。その先達の暮らしぶりを一度伺ってみたいと思うようになりました。

このような思考回路を経て、同じような思いを持っている友人と二人で、退職した女性教員のインタビュー調査を行うことを計画しました。一般に大学の教員は研究分野を超えた横の繋がりがあまりありません。ところが、女性研究者の場合は、1964 年に発足した「婦人研究者連絡会」—この組織は当時全国各地で立ち上げられました—、あるいは、日本科学者会議、また、登谷との関わりで言えば、1981 年に発足した「京都大学女性教官懇話会」などの存在が、研究者間の分野横断的な結びつきを可能にしてきました。我々はこの結びつきで知り合いになった人達にインタビューをお願いしました。これがなかったら、インタビュー調査については全くの素人の我々が、このような企画を実行できたかどうか疑問です。

インタビューには、前もってその人のプロフィールを知るために簡単な事前アンケート(資料参照)の記入をお願いしました。その後でインタビューを行い、その記録を簡単にまとめたものが今回の冊子です。

我々がこの記録を公開するのは、これから退職する人が生活設計を立てる時、参考になるのではないかと思ったからです。この記録が何らかの意味でお役に立つことを心から願っています。

2013 年 9 月

登谷美穂子

目 次

はじめに.....	登谷 美穂子
被災者調査に情熱を燃やす --- N・K さん	1
今度は私の番 --- K・O さん	3
実験家としての人生が終わってこれから --- J・T さん	5
人生の後かたづけも --- T・S さん	7
平和と科学リテラシーのために奮闘する --- S・K さん	9
NPO法人を立ち上げた --- M・B さん	11
自ら研究所を作って --- T・O さん	13
人がいなければ歴史は動かない --- Y・F さん	15
現代美術のコレクターになった --- T・T さん	17
苦しい時には前へ --- I・I さん	19
自由気ままな時間を満喫する --- Y・Yさん	21
手織物もパソコンを駆使して楽しむ --- M・T さん	23
定年前にやめたから出来たこと --- I・M さん	25
ソフトランディングする --- H・Y さん	27
友達と一緒に楽しむ --- K・K さん	29
おわりに	横田 綏子
資料	
1) 調査協力をお願い.....	i
2) 事前アンケート.....	ii

被災者調査に情熱を燃やす --- N・Kさん

N・Kさんは、大学院のマスター終了後、非常勤研究員 10 年を経て東海地方の私学に勤務、他大学への一時転出をはさんで、96 年 3 月に定年退職し、引き続いて近畿地方の私学に 3 年間勤務後、1999 年 3 月に 70 歳で定年退職しました。現在 82 歳で、夫と 2 人暮らしです。1 人娘は結婚して茨城県で暮らしています。この 2 年余、積年の過労と加齢のためか、次々に胸椎・腰椎を損傷して激痛に悩まされ、何ヶ月もコルセットをつける憂鬱な日が続きました。最近ようやく回復し始めたかなという状態とのことです。

朝は、6 時に起きて腰痛体操をしてから 30 分位歩いた後、夫の用意した朝食をとりますが、夫のおしゃべりにつられて、勉強するのは午前中 2 時間。昼からは家事と昼寝や休憩で仕事にならず、夜、食後 2 時間ほど雑誌を読んだり、新聞の整理をしたりするくらいだそうです。

退職後始めた被災者生活調査

N・Kさんの専門は、生活問題、家計分析、社会政策で、現場での実態調査とその分析が彼女の研究スタイルです。最初の退職直前に阪神・淡路大震災に遭遇しましたが、幸い彼女自身も家族も命に別状はなく、自宅もほとんど無傷でした。でも周辺の家々の多くは丸つぶれ、3 つも 4 つも先の通りまでが丸見えです。そのうちに目の前の公園では仮設住宅の建設が始まりました。こんな時に黙って見ているだけなんて、社会学者とは言えないというのが、当時の正直な気持ちでした。

被災者調査は、西宮市内に建設された 5000 戸の公営仮設住宅全世帯に、ゼミ生とアンケート用紙を配布することから始めました。以後、研究会や他大学のメンバーの協力も得て、多い時は 80 人近く、少ない時でも 30 人ぐらいが参加して 4、5 年継続し、節目の 10 年目にも少しまとまった調査を実施しました。当初集まった院生を中心とする調査員は、それぞれに研究テーマをまとめて職を得、17 年たった現在、直接かわり続けているのは彼女 1 人で、当初からの調査対象者約 100 名との交流を続けるのが精一杯です。学際的な研究会の立ち上げを試みましたが、うまくいきませんでした。

しかし分野は異なっても、建築やまちづくりなど他学会や研究組織との交流、海外も含む被災地調査、とくに労働組合との連携や全国的な会員制研究組織が立ち上げられ、災害関係のニュースの発行やシンポジウム開催、刊行物出版などが現在も継続しており、被災者生活調査を継続する上で大きな支えとなりました。でも日常的な研究の交流が途絶えがちになることは避けられません。

2005 年 2 月には兵庫県の私立大学の災害復興制度研究所主催で、全国各地の「被災地交流研究集会」が開催され、年を追って被災地や研究者との交流も広がりました。同研究所の主要な研究課題は、大震災後 10 年余を経過しても多くの課題が山積されている被災地の実態に迫ることでした。2010 年 4 月から同研究所の非常勤研究員として所属しましたが、論議半ばで、3.11 東日本大震災に遭遇、研究所の体制も変わりました。N・Kさん自身は、体調不良の時期と重なり身動きが出来ないので、改めて阪神・淡路の残された課題と向き合うことで、東日本大震災の復興に役立てられればと考えています、とのことでした。

1 回目の退職後、彼女が阪神・淡路大震災の被災者生活調査に没入できたのは、舅が東京の義妹宅に移って、40 歳代から 25 年余、途切れることなく続いた 4 人の老親の介護から解放された故でした。「夫との合意で、仕事との両立を基本に、一貫して家政婦さんの援助をフルに活用し、私が健康を損なわなかったことが幸いでした。2 人とも正規の研究職についてい

たから出来たことです。介護保険制度がなかった時期でした」と語ってくれました。

多忙な毎日

2000年代に入って生活調査の小さなまとめを出すまでは、資料の整理に追われる日々でしたが、大震災後発足した日本居住福祉学会の活動にも時間をとられました。その一つは、わが国で最初に高齢者の医療費無料化を実現した、岩手県沢内村（現西和賀町）の村づくりの記録です。行政と医療、村民の暮らしを追っての現地取材は、文献調査も含めて10回を超えました。今一つは、名古屋市南部での、医療生活協同組合の介護保険制度に端を発した地域づくりの記録です。伊勢湾台風後、一大工業地域へと変貌を遂げたこの地域には、現職の頃から足繁く通っただけに、生協設立50年の歴史を追う中での組合員の活動を軸にした地域づくりの学習会への参加は、物事を多面的に考えるよい機会になった、とのことでした。

また、この学会に参加したことで、2000年以降、「日本・中国・韓国 居住問題国際会議」に出席し、年に一度、報告・議論や施設の見学等を含め居住問題について、タイムリーな課題に接することが出来たのは幸せであったと言います。

しかし70歳半ば過ぎからは、様々な「手助け」の仕事に時間を取られる事が増えて、肝心の大震災のその後のまとめが一日延ばしになり、今や、もう待ったなしの状態です。でも締め切りがあるわけでもないし、仲間がいるわけでもないの、自分の都合で進められる反面、健康な時はいいが、やる気が出ないと、そのままになってしまいます。退職後、一番困るのは、仲間がいないことと、勝手を知った図書館が自由に使えないことだそうです。

私たちのこれまでの調査から浮かび上がってきた、退職後の生活の典型の一つは、退職後も研究を継続するというものですが、文系の場合、図書館の自由な利用と、自分の専門分野での研究会・グループを持つことが必須、というのが、この生き方を選ぶ人への彼女の助言でした。

80歳前後から生活は変わり始めた

退職後の暮らしについては、正直なところ現役時代には考える暇が無かったと言うN・Kさんですが、山の会には、50歳くらいで入会し、77、8歳頃までは、低山歩きを月に1、2回はしていたし、プールにも時々行っていたそうです。身体の不調が続いたここ2、3年で、生活の仕方はかなり変わったとのこと。映画も街歩きもあまり行かなくなったし、夫との外国旅行もそれぞれの都合で取止めることが増え、全体としての生活リズムが緩慢になった、つらいのは重いものの移動がしにくくなった為、せまい空間での資料や書物の整理が捗らなくなったこと、と言いながらも「研究者生活に入って50年余、社会政策学会では名誉会員の座に座りながら、次第に疎遠になっていましたが、東日本大震災以後、若い世代の研究者の報告や論文に背中を押されている自分を見つけて、もう一頑張りしなくてはと気を引き締めているところです」と張りのある若々しい声で語るN・Kさんでした。

(2012年6月インタビュー 文責 横田)



今度は私の番 --- K・Oさん

K・Oさんは、現在79歳、近畿地方にある国立大学を卒業後、すぐその大学の研究所の助手に採用され、他大学への転出を経由して1991年に母校の教授ポストに迎えられました。しかし、退職の2年前の1993年に、キャンパスでセクハラ事件が発覚し、彼女は「この事件に対処するために戻ってきたような感じがする、彼が免職になって問題の所在がうやむやになっていくことを見過ごすわけにはいかない、これは教授としての責任だ、と思って矢面に立って戦った。ここで黙っていたら、今まで女性教員の組織を作り、大学と種々の交渉を重ねてきたことが無になってしまう、と思った」と述懐しています。女性教官懇話会（当時の名称）の代表として、迅速、的確に大学に抗議し、裁判で戦ってきた姿は、全国の女性教員にも勇気を与えました。

国立大学を定年退職、次いで私大に移って講義、ゼミ、卒論指導と忙しくしていました。このような就業形態は、男性教員には多いのですが、女性教員の場合は、その絶対数が少ない上、職階分布が極端なピラミッド構造を作っているのです、まだまだ珍しい状況です。70歳で二度目の停年を迎え、卒論指導のため1年非常勤で勤めた後、現在、8年経過しています。専門は、中国史一明清時代です。女性史の研究家でもあります。

退職後の研究

「文系の人は、理系と違って研究意欲と利用できる図書館があれば、研究を続けられます。私は、近くの大学の図書館が利用できるのそこへよく行きます。国際会議にも2、3回出席しましたが、中国の大学は60歳定年なので、だんだん最年長になってしまっていて、何となく行きにくくなりました。むしろ、女性史関係の研究会に時々参加して、他の研究者との交流を保っています。

退職後のまとまった仕事は、『纏足の靴』（ドロシー・コウ著、平凡社、2005）の翻訳です。この本は女性史研究者として私とは全く異なる観点がおもしろかったのと、娘が著者と旧知で背中を押してくれたこともあって、初めての英語の本の翻訳として娘と共訳で実現しました。高校時代は英語がとても好きだったのですが、大学では中国語を勉強して、研究者になってからも外国人とは中国語で話をするので、英語は必要なかったのです。退職して、英会話の教室に通ったり個人指導を受けたりして3、4年英語を勉強し、これなら翻訳が可能かなと思うレベルになったので、この仕事をしました」と、退職してからも準備をきちんとしての仕事振りでした。

一般には、纏足という女性の抑圧の象徴みたいに言われますが、纏足の靴を通して、女性の美的感覚、思想、家族関係などが考察されていて、当時（16、7世紀）の女性も本を読んだり、旅行をしたりして、抑圧一辺倒の生活ではなかったということを明らかにしています。K・Oさんは、この本を単に翻訳するに留まらず、中国女性史に関する訳注、邦文の関係文献の補充・内容の紹介など、専門家ならではの広がりをもっています。

地域の人たちとのつきあい

K・Oさんは、「退職後は地域の人たちと親しくなろうと思って、町内会で介護の講習会を組織したりしましたが、なかなか親しい関係を築くのは難しいですね。何となくバリアーがあるようです。私は、もう退職したのだから“先生”とは言わないでくださいとお願いすると、今度は“奥さん”と呼ばれて、誰のことだろうと思ってしまいました。定年まで勤めていた人が地域社会にとけ込むのは、男女に関わらず難しいと思います」と嘆いていました。

夫の介護

「夫は高血圧だったのでいつか倒れるかも知れないと危惧していたのですが、2007年に脳梗塞で半身不随になりました。言葉は失われなかったのがよかったのですが、でも、介護に明け暮れる毎日です。子どもが小さい頃は、夫は育児に熱心で“僕はイクメンの元祖だ”と自称しているくらいです。退職後も料理なんかとても熱心で、いろいろな料理を研究していました。その分、今度は私が夫の面倒を見る番だと思っています。夫は、週の内、デイ・ケアとデイ・サービスの施設に各2日、計4日出かけています。施設では、半分くらいの方が認知症でなかなか話の合う人がいませんが、本を持って行って読んでいますのであまり退屈はしていないようです。その間、私は、病院に行ったり、買い物に出かけたりして、自分のことができますが、まとまった仕事はできません。

一人で介護をするのは大変で、はじめの頃は妹が手伝いに来てくれたりしていました。今は、週の1日は娘が来てくれます。私もいつ倒れても不思議ではない年齢ですが、共倒れにならないように、週3日は家政婦さんに夜泊まりに来て貰って、なんとか睡眠時間を確保しています。

最近、夫の後輩の方が、夫の仕事をまとめて本にしてはどうかと薦めてくださって、その仕事が進んでいます。夫とは同じ専門分野なので、私は、口述筆記をしたりして手伝っています。夫が書いた物にすべて目を通してある訳ではありませんので、こんなこと考えていたのかと新しい発見もあります」と、いろいろ工夫している様子が見ええました。

毎日の生活

「今は、夫の介護にかかりっきりになっています。そのためには、自分が健康でいることが大事だと思って、体力温存を第一に心がけています。太極拳もやっています。歩くことが好きなのですが、目的無しに歩くのは余り好きでなく、毎日1回は街まで買い物にでかけます。夫が倒れてからは何が起こるか分からないので、遠出はできませんが、ある時などは、ふと思いついて一人で伊吹山に登ったりしたこともあります」と、息抜きも上手なようです。

現職の人たちへのメッセージとして、在職中に何か体力作りをしてくださいと、彼女は前回もいっていました。また、介護が大変だという話などを誰かと共有したいと思っても、そのような話をできる人が周囲になくて、ついつい、子どもに電話をして愚痴を言ってしまう。退職後にこのような話が気楽にできる場があるととてもいいと思います。その意味では、在職中に、女性教員の分野横断的な集まりを組織して、そこでいろいろな分野の方と知り合いになったことは、とても良かったと述懐していました。

K・Oさんは、在職中は仕事に全力投球、セクハラ事件がおきれば全力対処、退職後も英語に挑戦して翻訳をと、各ステージで常に持てる力をフルに発揮してきました。現在は、介護のための体力温存が必要と考えて、これまた、全力投球の構えです。

(2011年3月インタビュー 文責 登谷)



実験家としての人生が終わってこれから --- J・Tさん

J・Tさんは、2000年に63歳で近畿地方の国立大学を退職し現在12年が経過しています。専門は光生物学分野で実験を研究手段にしています。3人の子どもは独立して、今は生物系研究者の夫と猫の二人暮らしです。

実験分野の研究者は退職すると実験場所がなくなるから、その後どのような生き方があるだろうかという点に関心を持ってインタビューに臨みました。男性の場合は、退職後次の職場で研究を続けることが可能な人は比較的多くいますが、女性ではそのような例をあまり聞きません。しかし、結果は我々の見識の狭さを見事に示してくれました。

定年までの研究者生活

彼女は、両親とも研究者で、家庭の中では女性であるがゆえの差別などは一切感じなかったようです。敗戦は彼女が9歳の時ですから、男尊女卑の風潮が当たり前であったことなどを勘案すると、これは希少な生育環境だといわざるをえません。

大学院終了後、数少ない奨励研究員を経て、1965年国立大学農学部の助手に採用されました。ちなみに、1968年の文部統計によると国立大学農学部の女性教員比率はほんの1.3%でした。

「教授からこれまでの生化学的研究ではなく、植物を用い、生きたままで、物理化学的手法で行えるテーマを探すようといわれ、細胞膜に焦点を当て、日夜悩みながら研究に明け暮れました。研究がやっと軌道に乗ったのは、1979年に電気刺激による細胞融合に世界で初めて成功した時からでした。その時は、これでやっと首の皮がつながったと思いました。当時この研究はかなり注目されたのですが、教授は別の人に残きをやらせ、私はこのテーマでの研究を続けることはできなくなりました。その後、教授と決別し、別の仕事を考えて始めたのが、光生物分野の研究です。これが可能になったのは、国立共同研究機構が広く募集している共同利用研究制度があったからでした。ここで出逢った人たち、研究を助けてくれた研究室の同僚や院生に支えられて研究が続行できました」と彼女は述懐しています。

実験家の退職

J・Tさんは、実験家の研究に対する思いを次のように述べていました。「実験家は、実験を始めてささいなことでも結果が出るとうれしくなって、次のことを知りたいという思いでさらに実験を始めます。たとえ無報酬でも実験設備が整っていて、自分のしたい実験ができたらいいなと思っています。だから、私は退職してもやり残した仕事もあって、どこかで実験を続けようと考えていました。実は、退職する2、3年前から、退職後うちに来て実験やりませんかというお誘いを受けていましたので、そのうちのどこかに行こうと思っていました。

退職後の研究場所で研究を行うために、私は、別の研究室に朝早くから出かけ実験材料の準備をすませ、その材料を持って行って実験をするという生活を日常的に行っていました。現役のときも、数ヶ月に一度は、院生と一緒に遠くの研究所まで出かけていって徹夜で実験材料の準備をしていましたから、これくらいは普通だと思っていました。加うるに、その研究室の学生の指導もしていました。そこは大きな大学と違ってドクターの学生もいなかったもので、私が手伝っていたことはよかったのではないかとと思っています。若い学生と接することは楽しいことでした。今でも電話をくれたりして貴重な財産だと思っています」。

このように、J・Tさんは退職した研究者が普通に実験をするといったスタイルとはほど遠

い、かなりハードな生活を、無給で10年以上も続けていました。

「しかし、70歳を少し越えた頃から体力的に無理だと実感して、第二の研究室を全部片付けて2011年6月に辞めました。それまでは、やりたいことがあればなんとかできていたのですが、私のやり方で続けることはできないなと思ったわけです。これが、私の本当の退職です」と彼女は締めくくっていました。

実質的な退職の後は

「今の毎日の生活は、猫が起こしに来てくれることで始まります。午前中は、まだ、書き残した論文が何編か残っているので、それを家で少しずつ書いています。これは、お金も時間もかけているので、結果を発表しておかないといけないと思っています。時間に余裕が出来、少し幅を広げて勉強が出来て楽しい時間を過ごしています。

私は蘭の花が好きでずっと集めていました。蘭は手をかけてやるときれいな花をよく咲かせます。20数年育ててきたものもありました。しかし、昨年、体調を崩した時あまり面倒を見られなくて、一挙に全部ダメになってしまいました。今は、息子が持って来てくれたたくさんさんの蘭の面倒を毎日見えています。

研究室に通っていた頃は、それ自体が運動になっていたのですが、特にこれといって健康のためのことはしていなかったのですが、辞めてしまっからは運動不足気味です。歩くこと自体を目的にするのは余り好きではないので、歩いて買い物にでかけることで少し運動不足を解消していると思っています。でも、孫がたまに遊びに来ると本当によく動くので疲れて体力不足を感じます。

退職したときは、外国旅行もしようと思って10年パスポートを取得したのですが、使わずに期限が切れてしまいました。でも、今から旅行に行こうという気にはなりませんね。

夫は何人かの人達とグループを作って、好き勝手なテーマで月1回程度研究会を開催しています。代表者の熱意で、すでに100回を越えたようすごいなと思っています」と退職後の生活を語っています。

これから退職する人へ

「退職後のことは、何年か前から自分が何をしたいかよく考えて準備しておいた方がいいと思います。情報網を張っておいて、いろんなことをアレンジできる人とコンタクトをとっておくのもいいのではないのでしょうか。できることが何もないというのは、さみしいですから」というアドバイスでした。

J・Tさんは、体力の続く限り退職後の第二の研究室でもハードに研究を続け、今、やっと一息ついたという感じを受けました。退職後の生活をどう過ごされるかを伺うには、もう10年早かったようです。

(2012年5月インタビュー 文責 登谷)



人生の後かたづけも --- T・Sさん

T・Sさんは、現在 73 歳、専門は乳幼児発達論です。大阪の私立短大講師 8 年を皮切りに、いずれも近畿地方の、公立女子短大 17 年、国立大 10 年、私立大 8 年と 4 つの職場を経験し、2008 年 3 月に 43 年間の勤務を終えました。2010 年からは、元の勤務先から頼まれて 1 年間の約束で特任教授として再び勤務しています。庭の手入れが好きだった夫を亡くしていたこともあり、退職の 1 年前には、旧居の庭付き住宅を処分してマンションへ移転しました。現在は娘さんとの 2 人暮らしです。

趣味を満喫したエアポケットのような時間

このような事情で、退職後の生活を経験したのは、今の所 2 年間だけですが、特に退職直後の 1 年間は、非常勤講師もせず、完全に自由なエアポケットのような時間だったと言います。ちょうど源氏物語千年紀にあたっていたので、これに関連する催しには、展覧会・講演会、公開講座、演奏会、能など、面白そうだと思ったものはほとんど行って、シンポジウムだけでも 3 つも参加しました。源氏物語は元の勤務先の同僚の研究テーマで、従来から興味は持っていたのですが、時間的に余裕が出来た時が千年紀に重なり、絶好の機会を十分に享受したようです。この機会に、円地文子訳で源氏物語も読みなおしました。

そのほか、芝居は以前から好きで「かもめ」と「ハムレット」などは、いろんなバージョンを見ていましたが、こちら時間も出来たことでいっそう拍車がかかりました。いわゆる有名劇団のものだけでなく、地元劇団のチェーホフ「三人姉妹」は面白い舞台の使い方をしていて、京大西部講堂では若い人に交じって、配られたカイロで暖を取りながら観た等々、T・Sさんの守備範囲は広いようです。京都にはあまり沢山の芝居がかからないので、時には大阪にも足を延ばすとのことです。市立美術館と国立近代美術館やデパートなどの美術展のチェックも怠らないそうですが、通りかかってふらっと入ったりもするそうです。

このように、エアポケットのような自由時間を存分に楽しんだT・Sさんですが、長続きしそうな趣味としては、結局は本を読むことに落ち着いたかなと感じています。読書の主なテーマは、二つです。一つは、好きな芝居に関するもので、演劇論関連の本は以前に買っている洋書も何冊もあります。もう一つはミステリで、サラ・パレツキーなどアメリカの現代女性作家 4 人がお気に入りです。翻訳が出るのが待てなくて、こちら原書のペーパーバックで読んでいます。これらの作家の作品は、いずれもアメリカ社会のある種の病理をとらえているところに惹かれるそうです。小説の舞台の都市の地図を買って、地理的な状況を確認しながら読むのも楽しいとのことです。これらの読書は、今のところ、通勤時間と寝る前の楽しみです。

まずやりたい人生の「おかたづけ」

このように年季の入った趣味を持っているT・Sさんですが、現在の勤務が終わって、再び自由な時間が出来たら、まずやりたいことは、本や資料・記録など身の整理です。父親の後始末の経験から、家の整理をしてから死にたい、子供にはやらせられないという思いを強くしたので、まず本や資料・記録などの整理をしたいと思います。マンションへの移転の際、かなり済ませたのですが、まだいくつも手つかずの箱が残っていて、最近引き取り手のない専門書の処分に頭を悩ませています。特に、手元に残っている沢山のデータについては、個人情報が入っているので、数量的なデータに書きなおし、他の人が利用できるよ

うにしてから、原データを処分しようと考えています。これは、自分でないと出来ない仕事として、是非やりたいと思っています。保育の現場での子供をせかすような「おかたづけ」の歌は、あまり好きでないT・Sさんですが、人生にも「後かたづけ」の時間は必要だと感じています。いやな「おかたづけ」の歌に追い立てられないように、自分なりに納得のいく「おかたづけ」を、ちょっと時間をもらってやっていきたいとのことでした。

健康を取り戻して

マンション暮らしは、便利すぎてどうかすると終日部屋から出ないでも生活できるので、1日2キロ以上を目標に、できるだけ毎日歩くことにしているそうです。70歳を過ぎても現役として勤務中のT・Sさんは、年齢を感じさせない若々しさです。しかし在職中には大きな病気も経験しました。50代の前半に、C型肝炎への感染が判明し、3ヶ月の入院治療を勧められたのですが、自覚症状もなく、ちょうど大学を移る時でもあったので、時々通院して様子を見るだけで薬も飲みませんでした。新しい勤務先の大学では、附属養護学校の校長も兼務し、在職時に阪神大震災にあたりして激務をこなしました。10年後の65歳の時、治療法も進歩して勤めながら治療できるようになり、入院も3週間で良くなったので、夏休みに入院、その後は通院治療をしました。その間はずっと食欲減退に悩まされ、しんどくて体重も減りました。治癒効果は50%位と言われましたが、さいわいウイルスは消えました。

女性研究者が定年まで勤めるようになると各種の管理職を務めることも多く、そのためばかりではないかもしれませんが、この調査に応じてくださった中でもかなりの方が、在任中または退職後に健康を害しています。まさに身を削って激務をこなした人も多いのではないかと思います。

これから退職する人へのアドバイスは特にはありません、と言いながらも、「みなさん抱負をふくらませておられると思うので、まずはそれをなさってから、いろいろな現実に触れて軌道修正していくことになるでしょう。モノを整理・処分し、持たない、増やさない工夫というのは、折に触れて言っていますが、本人はなかなか実行できず、今はこの秋から・・・と思っています」とのことでした。

専門とのかかわりで、公的機関などの研修の講師を務めたり、若い人たちと翻訳に取り組んだりしています。現在は、日本の子育てに関するアメリカ人の研究書を翻訳中です。時折頼まれる書評も、書き手を励ます意味でも、現職時代より丁寧に読みこんでかなり「良心的に」やれるようになりました。学会は整理して2つぐらいに絞り込みましたが、仕事がらみで状況をチェックしておかないといけない限りは必要だと思っています。現場の専門家との研究会も徐々に整理して、全国レベルの運営委員はできるだけ早くやめるつもりですが、地元の研究会は、責任もって出席するのは1、2にして、後は自由な立場で参加するつもりです。当分は仕事から完全に切り替える生活にはなりそうにありません。

(2011年2月インタビュー 文責 横田)



平和と科学リテラシーのために奮闘する --- S・Kさん

S・Kさんは、現在74歳。2001年に近畿地方にある国立大学での38年間の勤務を終え、今年で退職生活12年目です。現役時代は数少ない化学分野の実験家でした。現在は同じ年齢、同じ専門だったご主人と二人の娘の4人家族で暮らしています。

しばらくは非常勤講師

「63歳で退職しましたが、その後70歳まで非常勤講師をしていました。というのは、1994年に教養部が無くなるまでそこに所属していたので専門の研究以外に、教養の学生向きの科学史や科学論の講義を5種類ほど作りました。私が退職した後も、理学部の先生がこの講義は必要だと考えられて引き続き開講されていました。しかし、中世以降はなんとか教えられるが古代までは無理だということで、少し手伝ってほしいと依頼され、結局、半分くらいの講義を引き受けることになったからです。科学史の教員の人材はあまりないので、私学にも教えに行っていました。週3日くらい出かけて、コマ数は現職と変わりませんでした。それで毎日の生活が決められていたという面はあります。

70歳になったら東京に行かなければならない仕事はやめようと思っていましたので、それまでやっていた日本科学者会議の常任幹事をやめました。しかし、代表幹事をやっていた人がやめたいからその後の候補者をさがしてくれといわれていろいろ探しているうちに、私を推薦した人がいて、結局、東京行きは続いています」とまだまだ解放されないようでした。

市民運動全開

朝は6時から7時の間に起きます。夫が朝刊の配達をしているので、最初の頃のように目覚まし時計の音で起きることはなくなりましたが、帰ってきた音で目が覚めて起きます。

午前中はあまり出かけないで、家のことをしています。お昼を食べてから出かけることが多いですが、夜の会議も結構ありますね。日本科学者会議（JSA）の研究会や哲学研究会などには、定期的に出席しています。

JSAには全面的に関わっていますが、退職後はより地域に密着した形態になってきています。たとえば、大阪のJSAは、シャッター通りになっている商店街が、サイエンスカフェをやりませんかと言ってきたことが発端で、3年前からサイエンスカフェを始めました。はじめは商店街の真ん中の道路でやっていました。今は、シャッター商店の一室をきれいに改装して使えるようにしてくれましたが10人くらいしか入らないので、道路にはみ出してやっています。退職した高校の先生の話はとてもおもしろく、理科教育の先生方は皆さんすごい財産を持っておられます。それは、授業で科学に興味のない生徒達の関心をいかに引き出すかの工夫を長年重ねてこられた賜です。あるとき、先生が「今度、理科実験で豆腐を作る」といったら、生徒達が「そんならねぎが要るな」「醤油も」といった風に、普段、理科実験に見向きもしない生徒が関わってくる、といった具合です。

サイエンスカフェでは、理科実験に親子で参加する人もあるのですが、親の方が実験にのめり込んでいます。私は、もっぱら講師の手配をしています。

彼女は、他にも、大阪憲法会議や大阪九条の会などに関わって非常に多彩な活動を展開しています。その活動の原点は、平和の探求と科学リテラシーを高めることにあります。

定年後やりたと思っていたこと、やっていること

結局、定年になってもとても忙しくて時間が無く、新たに始めたことは何もありません。

在職中は息抜きが上手でコーラスや、学会参加の折りには全国の仏像鑑賞とかしていました、今はしていません。退職後は、近畿一円の美術展には出かけています。定年になったら精進料理一式を絶対作ろうと思っていましたが、それもまだです。もう、年齢的に無理かなと諦めかかっています。

焼き物は昔から興味を持っていました。それは、私の専門と深く関わっています。焼き物の色は、釉薬にどんな金属イオンが入っているかで決まってきます。焼き物を見に行ったとき、その色を見て、これは銅の系統や、こっちはマンガンが入っているとか、鉄がはいっているとか思っています。日本には中世から現在まで生産が続いている代表的な窯が 6 個あり、六古窯といわれていますが、それらは全部見えています。

観光旅行などは特にしていませんが、先日韓国へ倭城を見に行きました。秀吉が朝鮮侵略を行ったとき、韓国に城を 50 前後建てています。それが「倭城」と呼ばれているのですが、その研究が 15 年前くらいから始まっています。大阪歴史博物館の館長さんだった人がその倭城を探索する旅行を企画してくれて、今年は、九州の名護屋城を出発点にして対馬に渡り、船で韓国へ行きました。建物は残っていないのですが、本式の石垣を築いているところは今も残っていてそれらを見てきました。

健康のために

実は、2003 年に大阪で科学者会議の女性研究者・技術者シンポジウムが開催された時、脳出血で一度倒れました。しかし、その後特に後遺症もなく健康なのでこれと言ったことは何もしていません。むしろ、逆に、院生の頃に廊下で滑って尾てい骨を打ってから調子が悪かったので、15 分くらいの腰痛体操を毎日ずっと続けていたのですが、2 年前くらいにやめてしまいました。というのは、大学から持ち帰った本や書類があり、空間がなくやめてしまったのです。復活しようと思って時々やるのですが、またすぐやめてしまいます。

これから退職する人に

自分のキャリアを生かして退職後の生活を過ごすやりかたもありますが、私は、長い人生、キャリアにこだわらなくて、もう一つの人生を作った方がいいのではないかと考えています。例を二つあげます。私の父は商売人だったのですが、60 歳で辞めて考古学に一生懸命になっていました。羽曳野市に住んでいましたので文化遺産がたくさん出てきます。最後の方は、有名人が見学に来たときの案内役を務めていました。もう一つ、これは夫の話ですが、彼は化学が専門分野だったのですが、退職と同時にすっぱりとやめて、菌類に一生懸命になっています。毒キノコは最終的には胞子を顕微鏡で見て判断するのですが、山で危ないと思ったキノコは持ち帰って調べています。最初の頃は、私が実験台にされるときもありました。

S・K さんの退職後は、実験室での研究をやめた以外は、現役の時の活動基盤を糧により幅広く、生活に密着した科学リテラシー活動を継続しています。ついでに話して下さったご主人の第二の人生の生き方は、S・K さんの生き方とは対照的で、こちらもとても興味のあるお話でした。

S・K さんは 2013 年 4 月突然亡くなくなられました。謹んでお悔やみ申し上げます。

(2012 年 4 月インタビュー 文責 登谷)



NPO法人を立ち上げた --- M・Bさん

M・Bさんは、2008年に70歳で東海地方の私学を定年退職し5年経ちます。退職するまでは、平日は大学のある街のアパートに、週末は京都の自宅にという生活形態でしたが、現在は、自宅で息子さん一家と住んでいます。娘さん一家も京都在住です。

M・Bさんの専門は、理論物理学です。小学校からの同級生だったご主人も研究者で、研究分野が近かったので共同研究をすることが若い頃の夢だったそうですが、1990年53歳で早世され、残念ながらその夢は一回しか果たせなかったようです。

インタビューに伺った場所は、退職後、2009年に立ち上げたNPO法人“あいんしゅたいん”のオフィスでした。2012年までは京都大学とのコラボレーションの関係で、大学の施設を借りていましたが、それもできなくなり、新しい家を購入してNPO法人の事務所を開設したそうです。平日は、お弁当持参で10時にオフィスに来て、夕方の5時まで法人の仕事をしているとのことでした。

新しい分野の研究に取り組む

冒頭から、M・Bさんは「この間、論文を書いて投稿したのだけど、今、レフェリーから返事が来てその答えを書いているところです。私にとっては全く新しい分野で、若い人と一緒に研究しています。3.11東日本大震災の後、低線量放射線被曝の人体への影響を定量的に扱う枠組みについて研究してきました。普通、被曝線量の健康への影響は、これ以下の被曝量では人体に影響がないという閾値がなく、直線的に被曝量に比例するというLNT（Linear Non-Threshold：閾値なし直線）仮説が使われています。しかし、LNT仮説には低線量被曝に対する細胞の修復機能が入っていません。我々はそれを考慮した数理モデルを作り、実験データとの定量的な比較ができる道を開きました。それで、論文三本書きました。今までは物理関係の雑誌に投稿してきたけれど、生物分野の人にも読んで貰わないといけないと思っています」と語り、退職者へのインタビューとは思えないすごい勢いにインタビューアーは圧倒されました。

NPO法人“あいんしゅたいん”の設立

2000年代前半より博士号を取得しても就職できない人達、いわゆるポスドクが増え、M・Bさんはその人達を支援するためには個人の力だけではどうにもならない、これは組織を使わないと何ら解決策は得られないと考え、2007年に文科省の支援を受けて物理学会にキャリア支援センターを立ち上げました。そのときの文科省からの条件は、3年の支援が終わったらNPO法人か何かでポスドク支援を行う組織を立ち上げることでした。彼女は次の年に物理学会長を引き受けましたが、その所信表明にも、ポスドク支援を行いたいと書いたのを覚えていると述べています。そのような経緯を経て、退職後、2009年に数人の仲間と立ち上げたNPO法人が“あいんしゅたいん”です。

「ポスドク支援ではいろいろな人が“あいんしゅたいん”に相談にやってきます。2009年頃は若者の雇用状況を改善すべく社会的にも人材育成支援活動が活発になってきて、京都でも京都府と京都大学など産学公連携による人材育成プログラムが立ち上がりました。しかし、その募集要項を見ると35歳までという年齢制限が入っていました。これに対して、“あいんしゅたいん”では、ポスドクの30%弱が35歳以上だという状況に鑑み、この制限は憲法違

反にあたるという声明を出しました¹。年齢制限は次の企画から外されました。このとき、NPO 法人という社会的な組織が発言することがいかに大切かを痛感しました。このことがきっかけで、社会問題となった若者の就職難にむけて雇用促進事業に（一年間ですが）採択され、ポスドク 3 名を雇用、一年後には全員職を得ることができました。

NPO 法人を立ち上げた理由のもう一つは、退職後の研究者の研究場所を確保することでした。この場所というのは物理的な意味ではなく、帰属を保証するということです。研究者は一旦退職すると所属が無くなり、論文を出版するときや国際会議での発表でも無所属となりやりにくいわけです。また、研究情報にもアクセスできず、だんだん研究のモチベーションが無くなります。これを改善するには、NPO 法人で研究所を立ち上げ、研究者の所属を保証し、科学研究費の申請もできるような場を提供すれば良いわけです。ただ、そのためにはクリアしなければならない条件があり、今それを準備中です」と、彼女は一つずつ問題を解決していくプロセスを語ってくれました。種々の分野の人が集まり、各専門分野からの寄与を有機的に取り入れた研究を続けることができる組織の設立は、定年退職しても研究を続けたい人達の理想の実現だと M・B さんは考えています。

“あいんしゅたいん” は、知的人材活用という意味で科学普及、情報発信を目的としており、親子理科実験教室を毎年開催し、一般人向けの科学教室の企画も行っているそうです。

このように、M・B さんは NPO 法人の活動とその活動から派生してくる、というよりその活動にとって解く必要がある問題に取り組んで研究し、論文にになってしまうという超人技を発揮して毎日の生活を送っています。健康状態もよく、とても忙しく、のんびりしている暇などどこにもない、またそれが楽しいという様子の M・B さんでしたが、今後、この NPO を経済的に支えていくのが一つの大きな課題だと述べていました。しかし、e-ラーニング教員免許状更新講習推進機構の教科書作成に携わったり、助成団体に応募したりして、持ち前のバイタリティでこれもまたなんとかなりそうな雰囲気でした。

他にやりたいこと

「コーラスが好きで現職の忙しい時でもやっていましたが、今は忙しくてとても時間が取れません。しかし、七ヶ国語が話せるようになるというヒップクラブには今も入っています。ノーベル賞受賞者の南部さんからこのクラブのことを伺ったのが入会のきっかけですが、自分が言語をどれくらいものにできるか知りたいと思っています」と、どこまでも挑戦的です。

これから退職する人へのアドバイスを伺うと、「女性研究者は退職後も活動をしている人が多く、現職時の知識を何らかの形で生かしたり、全く新しいことに挑戦したりする人もいます。ネットワークを作るのも一つの方法、あるいは、我々の NPO 法人に加わって活動してくれるのもいい、他にも立ちあがっているネットワークがあるから、そのようなところに参加して活動していくのはどうでしょうか」と、積極的な提案でした。

(2013 年 5 月インタビュー 文責 登谷)



¹ <http://jein.jp/npo-introduction/message/252-appeal2.html>

自ら研究所を作って --- T・Oさん

T・Oさんの朝は、5時半頃に始まります。毎日ラジオ体操は欠かしません。中国地方の国立大学を退職して9年目の今年4月からは少し暇になりましたが、それでも趣味も含めてまったく外出しない日は、月に1回か2回と、71才の現在も活動的な毎日です。

T・Oさんの退職後の生活は、一つは専門を生かした仕事、二つ目は自分が吸収する勉強会、最後はこれも専門に関わるボランティアから成っているとのこと。50代で、同じ大学の同僚だったご主人を亡くされ、現在は息子さんと二人暮らしです。

退職後も実践の現場で

専門は、臨床心理学で、県の臨床心理士会の会長を6年務めるなど、実践にも積極的に携わってきました。現在も、県立の特別支援学校で、カウンセラーとして教員のメンタルヘルス相談を月に1回程度4校を担当しています。また、1995年からはスクール・カウンセラーとして、公立小・中・高校で生徒、保護者、教員を対象に相談に応じていました。退職後はそれに加えて若いスクール・カウンセラーをサポートするスーパーバイザーを兼務して、週3回、県の教育委員会に出勤していました。70歳を区切りにしようと考えていたので、今年の4月にはそれらは辞め、徐々に教育現場の仕事からは撤退してきました。しかし、学校現場は事件、事故、不祥事など予測できない様々な出来事が生じるので、そのような緊急事態が発生したときには、現在も心のケアを行う緊急支援要員として教育委員会から要請を受け、学校に出かけることもあります。

退職後も、上記に加えてごく最近まで各種の講演、元の勤務先での集中講義や女性研究者支援センターの専門カウンセラーなど、忙しい毎日でしたが、今年からようやく暇になったといいます。しかし、T・Oさんの退職後の生活の柱となり、現在も続けているのは、自ら設立した山陰心理研究所です。

活動拠点を作る

退職3年位前からどういう生活をしようかと、家庭裁判所の調査官をしていた近所の友人とも話し合っていました。退職直前に、勤め先が、臨床心理士資格の取れる指定大学院として認定されました。ただ1人の専門担当教員としてその土台を作ってきたこともあり、当時は県内にあまりなかった卒業生の勉強・実践の場をつくりたいと思い、自分の居場所と卒業生が集まれる場所として、この友人と一緒に、心理研究所を立ち上げました。少しは地域に貢献できたらいいなという思いもありました。研究の面では、十分なことができたかと思うとためらう部分がありますが、臨床心理という分野は、理論と実践が両輪で、実践ができない人は現場で役に立たないので、実践に役立つ人を育てたいということで、自分の中では一本筋を通したと思っています。

退職前年の秋から、自宅近くの民家を借り、修理・改修や家具調度の整備に退職金をつぎ込み、退職と同時に研究所を開設しました。当初3年間は家賃も1人で負担しました。現在は所員の会費で運営しています。

研究所の活動は大きく分けて3部門です。第1は臨床心理部門で、心理相談、臨床心理士のための研修の企画・運営、相談援助にかかわる講演・グループワークなど。2番目は特に家族問題にかかわる相談。全国の家裁調査官OBが立ち上げた公益法人家庭問題情報センター(FPIC)の地方ファミリー相談室として、離婚した親と子の面会交流の援助などを行っています。3番目はハラスメント・子育てに関する講演です。自分たちの勉強、研修の場とし

て、継続研修という月 1 回の事例検討会、年 2 回ぐらいいは東京などから講師を招いてワークショップを開いたりしています。卒業生の経験交流の場、先輩・後輩のつながりを深める場にもなっています。先のことは分かりませんが、研究所は、家主との契約期間である向こう 3 年間は今の場所で続ける予定です。

これらの研究所の活動は土・日が主ですが夜まで続くこともあり、平日はスクール・カウンセラー、スーパーバイザーの仕事が週 3 日、不定期の仕事も入るなど、63 歳で退職した直後の数年は、行き先が日替わりで、予定がびっしりの毎日でした。

臨床心理という専門分野の特性にもよりますが、T・Oさんの退職後の生活は、自分の学識経験をフルに生かした好例と感じました。

これらに加えて、民間の被害者サポートセンターの副理事長、医師や大学のカウンセラーも交えた精神科クリニックでの勉強会、1 人親支援＝子供の支援のために弁護士、臨床心理士など専門家で構成する「連携の会」、精神科クリニックでの鬱の人を対象としたグループワークと、活動の場は現在もなお次々と広がっているようです。このように、今も忙しい日々を送っている T・O さんですが、退職後の一番の変化は、やりたくないことは断る自由があることだと言い、その意味で今は気楽だとのこと。職業柄か、息抜きも上手で、カウンセラー対象の年 1 回の全国規模のグループワーク（エンカウンター・グループ）は、命の洗濯となっていて、全国各地に行って美味しいものを食べて自分を見つめる機会、ストレス発散の場として楽しみにしているそうです。

趣味も精力的に

T・O さんは趣味にも精力的です。クラシック・コンサートや映画・演劇鑑賞の他、団地内の各種趣味の会に参加して、今やっているのは、短歌、百人一首、童謡を歌う会などのほか、この 4 月からは編み物サークルにも参加するようになりました。団地の趣味の会は、世間話の苦手な自分にはどうかなと思っていたけれど、参加してみると、みんな良い人で、適当な距離を置いた付き合いでそれぞれ雰囲気の良い会だと言います。親切で親しみやすい彼女の人の柄にもよるのでしょうか、地域にも自然に溶け込んでいるようです。研究所の活動などと重なって、出られないことも多いのが残念だそうですが、退屈する暇も無いように見受けました。

旅行も大好きで、これまでに行った国は 15 カ国以上に上りますが、まだまだ行ってないところがあるので、毎月でも行きたいそうです。近くにいくつもある温泉にも、毎日でも入りに行きたいと言います。園芸もやってみたいとのこと。

これから退職する人へのアドバイスを伺うと、「まずは健康であること。そのために歩くのはいいかな。同行の友がいればなお楽しいでしょう。また、これまでできなかった趣味などをやってみる。仕事人間であったなら、何が自分に合っているのかわからないので、まずはいろいろ参加してみて、自分に合っていそうなものを見つける。そこで友人ができるかもしれない。職場で知り合った友人とは一味違う人たちとの出会いが楽しみです」とのことでした。

折々のウォーキングと 3 年目になる毎日のラジオ体操以外は、特別な健康法はやってないそうですが、元気一杯、意欲一杯の T・O さんです。

（2011 年 7 月インタビュー 文責 横田）



人がいなければ歴史は動かない --- Y・Fさん

Y・Fさんのお宅を訪ねたのは、彼女の散歩コースの神社で、お堀のアヤメが美しく咲き誇る頃でした。Y・Fさんは、大阪南部の私学で18年、名古屋の私立女子大で14年勤めましたが、その間ずっとこの京都市内の自宅から往復4時間以上かけて通勤しました。定年1年前の69歳で退職して、今年で4年経ちました。

遠距離通勤の日々

通勤は大変でしたが、ヨガや体操など、いろいろな運動をしてきたせいか、大きな病気もしないでなんとか勤め続けることができました。ただ、定年前10年間は、入院するようないまい発作に何回も襲われ、あちこちの病院を回りましたが、治療できませんでした。退職すると発作はピタッとなくなりました。

現在も、近くの小学校でやっている体操教室に週1回通っています。基本的にウォーキングなど身体を動かすことが好きです。通勤のため、朝は6時起床が習慣になりました。「朝早く起きて電車に乗り、人が大勢いて動いている中に行くと、元気になる気がした」という言葉を聞くと、小柄で華奢な彼女が、遠距離通勤を続けられたのは、精神的な要素もあったのではないかと感じました。

退職前から京都市内の私立大学で非常勤講師をしていましたが、73歳という年齢と体力では、これ以上の講義は、学生にとって迫力に欠けるものになると思います、2013年3月に辞めました。講義から解放されたので、24時間自己責任になり、辛い気持ちになっています、夕方になると今日も1日、何もしてないと思って落ち込んでしまいます、と語るY・Fさんですが、後に述べるように、インタビューアーから見ると、今も多彩な活動が一杯です。

司書のライフヒストリーの記録に取り組んで

現職の時から、専門の図書館学・社会教育に関連する共同研究に参加していましたが、今も、大阪を拠点とする図書館学の研究会に入っています。アメリカ文化センターの元司書で家族が長崎で被爆した女性（現在93歳）を囲む会のような形で月1回集まる、長崎原爆に関する読書会の世話役もしています。

69歳までの現職時は、週8コマの講義や学務で手一杯で、退職したら時間ができるから好きな研究が出来ると思っていただけ、退職してみたら、研究業績を報告するなどの義務がないためか、研究を継続するのは無理だとわかりました、と語るY・Fさんですが、現在は図書館司書のライフヒストリーの記録研究会を立ち上げてその事務局を担っています。これまでに5冊の冊子を刊行しています。それを始めた土台には、研究テーマである多文化サービスの歴史について、カナダ国立図書館多言語蔵書部部長であるマリ・ゼリンスカという女性司書にインタビューに出かけた時、人がいなければ歴史は動かないことを痛感した経験がある、と言います。母国語であるポーランド語の本を読みたいという彼女の切実な要求から、移民の母語で書かれた図書の提供が開始されます。世界の多文化サービスは、ポーランド移民一世である1人の司書が提唱したことから始まったのです。図書館はそれを担う職員によって変革してきたのに、その人物のことは研究されていないので、と情熱を込めて語ってくれました。研究テーマにはなりにくい、個々の司書のライフヒストリーの記録をまとめるというこの取り組みは、退職後だからこそできるのかもしれませんが。全体の企画や編集を、京都在住のY・Fさんともう1人のメンバーが担い、さらに新潟、金沢、仙台などに散らばっている司書達とのメーリングリストでの遠隔研究会をしているそうです。

新しい挑戦

最近、日本語教師養成講座の受講を始めました。日本語教師資格取得には、420 時間の受講が必要なので、今の年齢から始めても前途遼遠、無謀とは思っていますが、留学生に日本語を教えるボランティアをほんの少しでもやってみたいと思ったからと話してくれました。資格を必要とするボランティアではないのに、50 万円もの受講料を払って事前準備をするのは、真面目な彼女の性格がなせることなのでしょう。

同年輩の退職者仲間の友人たちと、社会的な問題を話し合ったり美味しいものを食べに行ったりするのは最も素敵な時間です。若いころから沖縄の基地問題などに関心を持っていたけれど、現職のときは取り組むことができなかったのが、現在は学習会や、集会などに参加できるのがとても有難いと言います。

今の暮らしぶりを伺うと、まず、朝は六時に起きて、ベッドの中でラジオのビジネス展望という番組を 30 分聞きます。経済学者が最新の経済問題をわかりやすく話してくれて、勉強になります。午前中は、家にいて、メールをチェックしたり、新刊の専門雑誌をみたり読書などしています。午後は、人に会ったり、買い物したりして外に出ていくことが多いそうです。友人と会るのがもっとも楽しいひとときです。東京の街中で育ったせいか、疲れたり落ち込んだりした時は、自然の中でゆったり寛ぐより、賑わっている場所や、新しい施設などに行くというのが、Y・F さん流の元気回復法です。京都駅のように奇抜な建物に行くと気分が高揚してきます、と話してくれました。

亡くなった母親の介護をきっかけに 10 年前から妹さんと同居しています。それぞれ予定があるし自由に時間を使いたいので、お互い好きな食事を作り、分け合って、各自好きな時間に食べることにしているそうです。自立した姉妹の同居の合理的なスタイルは、私たちインタビュアーにとって新鮮なものでした。

模索は続く

これから退職する人へのアドバイスとしては、女性研究者の場合、就職年齢が高く昇格なども遅かったりして、公的年金はとても少ないことが多いので、若い時から共済組合などの個人年金に加入しておいたほうが良いということです。また、退職後、研究関係の役職を頼まれましたが、リタイアしたんだしと断りました。後で、知人に、視野も広がるし会議などで外に出る機会も増えるので、せっかくの機会をもったいないと言われ、今、後悔しています。退職後、そのような機会があったら、消極的にならないで引き受けたほうが良いと思うとのことでした。

傍から見ると、多彩な活動で忙しそうな Y・F さんですが、退職後、時間が出来たのに、期待したことができない自分が情けない、体力と記憶力が急速に衰えてきたと言います。

現職時、図書館の年次国際会議に出席するため、毎年のように世界各国に出かけて、それは素晴らしい体験でした。しかし残念なことに今ではもはや、長時間飛行機に乗る体力がないので諦めました、と語る彼女ですが、新しいことに好奇心一杯で、今まで知らなかったことをやってみたい、研究も心がけたいという彼女の模索はまだしばらく続きそうです。

(2013 年 4 月インタビュー 文責 横田)



現代美術のコレクターになった --- T・Tさん

T・Tさんは、現在、69歳、近畿地方の国立大学を2006年3月に退職しほぼ5年経過しています。専門は住居学です。女性研究者は、夫と同じ地域に職を得られず別居する例も多いのですが、彼女は2回の職場移動にも関わらず、いずれも通勤圏だったため一度も別居せずにすみしました。在職中から、「ていねいに暮らす」「美しく暮らす」を研究の中で提言し、自宅には現代美術の作品がところ狭しと飾られ、アートと共にいる暮らしを実践していました。

彼女は、退職後、ガンを患い今でも再発の恐れがあるにも関わらず、持ち前のエネルギーと笑顔で、多くの知人、友人に囲まれて元気はつらつと過ごしています。人が集まる住居が彼女のモットーですが、その通り、彼女を慕って訪問する客は絶えず、常に周囲にいる人たちにエネルギーを与え続けています。

入院で始まった退職生活

T・Tさんが所属していた大学は附属中学や高校がいくつかあり、その教育機関の校長は大学の教員が務めることになっていました。彼女も、退職する3年前から中学校の校長を務め、毎朝校門に立って生徒を迎え、お昼休みは生徒と一緒に弁当を食べ、年賀状をくれた生徒にはその人にふさわしい言葉を書いて返事するなどという熱烈校長をやっていました。もちろん、大学の講義やゼミも普通にあり、二足のわらじを全力投球で履いていたため相当の激務だったようです。通勤電車で最寄り駅を乗り越して終点までいくことは年中行事で、最後の1年は疲労で駅から自宅までが歩けなくて毎日タクシーで帰りました。そのような状況の中で、退職を目前にしてガンが見つかり、医師からはすぐ入院して治療しなさいと言われました。しかし、年度末の中学校では、卒業式など行事が目白押しで、校長が休める状態になく、また、彼女の責任感からも休みたくなかったといえます。無謀にも「退職したら入院します」と医師に告げて3月を乗り切り、4月に即入院したのが退職者としての生活の始まりでした。

現代美術コレクターとして生きる

彼女は、在職中、研究することはすごく楽しかったし、学生を育てることもおもしろかったが、退職してもそれを唯一の生き甲斐とするかという点については、疑問に思っていたと述べています。というのは、彼女は、小さいときから絵が好きで、大学も美大へ行きたいと思っていたくらいでした。しかし、家族の反対にあって実現せず、絵に対する思いもどこかにしまわれていたのですが、1989年にふとしたことから現代美術作家の作品をみて心を驚づかみにされ、美術に対する思いが再燃しました。それは、これらの美術作品に囲まれて生活し、本当の意味で豊かな暮らしをしよう、その生き方は、自分の専門である住居学での主張「美しく暮らす」とも同じベクトルをもっているはずだ、という信念に基づいたものでした。それからは、自分の審美眼にあった現代美術の作品を蒐集し、それを自宅のあらゆる空間に展示し、アートを日常的に楽しむという生き方をしてきました。そして、徐々に、退職したら現代美術のコレクターとして生きようと思うようになりました。退職後、学会はすっぱり脱会、いろいろな公職の委員も徐々に辞退し、研究にかけていたエネルギーをすべてコレクターとしての生き方に注いでいったといえます。普通の人にはなかなかできないその見切りの良さが、第二の人生にかける意気込みを証左しています。

現代美術展覧会 ― 自宅から美術館へ

T・Tさんは5人兄弟でしたが、3歳年上のお姉さんとはほとんどの部分を理解し合っている関係でした。そのお姉さんがあるとき事故で亡くなったのです。69歳でした。彼女はノイローゼになるのではないかと思うくらい嘆き悲しみながら、死後のあらゆる処理をする中で、人間はいつ死ぬかわからない、自分も69歳になるまでにコレクターとして蒐集した現代美術作品を、社会的財産として多くの人が楽しめるように、社会に返そうという想いを抱くにいたりしました。

20年間に蒐集した全コレクションは、130作家、1000点を越える量になっていました。多くの作品が、作家と交流しながら入手したもので、いわゆる美術愛好家もつような系統性はありませんが、T・Tさんの心の琴線に触れた作品という集合です。それまでも、作品を美術館に貸し出したり、小さな展覧会を開催したりはしていました。しかし、もう残された時間が少ないという思いに駆られて、和歌山県立近代美術館にお願いして、作品群の展覧会を「自宅から美術館へーT・Tコレクション展ー」として開催し、そのまま、全コレクションをそこへ寄贈しました。その時の図録に掲載された作家のコメントには、「自分の作品が初めて売れてうれしかった」、「おかあさんのようだ」など、彼女の作家への励ましがうれしかったと書かれています。ここにも、作品を買うだけでなく作家と交流しながら、作品と作家と一緒に自分のものにしてしまうという、彼女のコレクターとしての考え方が反映されています。

「現在進行形の文化財」を支援する

彼女は、退職後は「健康」・「お金」・「生き甲斐」の三本柱が生活に必要なだといいます。彼女の毎日は、ガン再発の危険もあって、健康指向の生活に傾いています。毎朝、2時間のウォーキングの後朝食をとり、雑用を片付けた後は大阪や京都の画廊を廻ります。それは、コレクターとしての勘を研ぎ澄ましておくための必須の行動です。たまには、気に入った作品を買ってしまうこともあります。他に、ヨガ教室に週1回、コンテンポラリーダンス教室に月1回通っています。

経済的には年金でまかなっていますが、公的年金に加え私的年金もあるので贅沢をしなくても生活はできます。しかし、就職当初から女性研究者の研究環境改善のために尽くしてきた彼女は、退職後はお金が大事ですという話をするとき、大学院を終えても就職口のない女性研究者のおかれている現状を見ていると、その人達を前にしては言うべき言葉がないともいいます。

時々、まだ、講演会も依頼されますが、その謝金で作品を買います。これは社会貢献のつもりでやっています。「美術館にアートを送る会」の副理事長も務めています。現代美術を「現在進行形の文化財」と定義して、作品の購入や、年1回渾身の力を込めて作品展を開催する作家との接触を通して、作家の育成を視野に入れての仕事だと語ります。ここには、現役時代の教育者としての姿勢が現れています。

(2010年12月インタビュー 文責 登谷)



苦しい時には前へ --- I・Iさん

I・Iさんは現在 69 歳、2006 年 3 月に 63 才で中国地方の国立大学を定年退職して、今年で 6 年目に入りました。息子さん 2 人は結婚して他県で家庭を持ち、夫と 2 人暮らしです。

彼女の専門は、家政学、特に子育て・家族問題ですが、説明が難しいとのこと。保育と言うと幼児教育と思う人が多く、幼児教育でなくて育児学というと、小児医学ですかと言われます。家庭の中のことは軽視されてきたこともあって、学問として認知されにくかったと言います。育児は幅広い内容を含み、学部で担当者が 1 人だったこともあり、医学から教育・福祉の領域まで何でもやらされてきたことは、専門家としては欠点だけど、定年後の活動にとってはこの幅広さは良かったと思うそうです。

I・Iさんの現在の活動は、主としてさまざまな団体の役員ですが、家にじっとしているのが苦手で、それらの用事が無い時も、ほとんど毎日外出しています。出かけておしゃべりするのが、今の彼女の手軽な気分転換法になっています。友人と言うほどでなくとも、気軽ににおしゃべりできる知り合いが多いのも、I・Iさんの特徴です。

「定年」はまだ先のこと？

退職後 3 年間は、特任教授として週 3 コマ講義をもち、1 日 6 時間勤務でほとんど毎日出勤していました。その後は種々の役職で忙しく、現在に至るまで、自分では「工作中」の気分です。

現在の役職の主なものは 4 つです。まず県の人事委員会委員で、県職員の待遇・懲罰・採用試験の基準などに関する審議・勧告などの他、職員採用試験の最終面接なども行っています。不定期ですが夏から秋にかけては忙しいそうです。この委員会では初めての女性委員です。次に、県の男女共同参画センターの館長、週 1 回、電車で往復約 2 時間かけて通っています。家裁の調停委員、これは都合が悪ければ断れるし、最近は件数が減ってきていますが大体月 1 件程度です。地域生協の理事もやっています。月 1 回の理事会は、午前 10 時から 2 時半ごろまでの長時間の会議です。今年は子育て支援の担当になり、その会議が月 2 回ぐらいあります。その他、講演が 2 ヶ月に 1 回ぐらい。これらは、一つ一つはそれほど時間をとらず、話が来たときは出来るような気がして引き受けるが、やってみると休むまもなく仕事が続いたりしてしんどくて、そういう調整がうまく出来ていない、と言います。

息子さんの病気と両親の介護

これらの役職は、どれも息子さんが発病した 2009 年以後始めたものです。一番大変な時に引き受けたのは、子供の病気にのめりこまない、それだけ考えていたら参ってしまう、自分も別のところで必要とされている仕事があることはいいかな、忙しいことは忙しいけどその中でメリハリが付く、と考えたためです。千葉にいる息子さんの見舞いに行くのは時々ですが、そのことは常に頭を離れません（その後、2012 年 4 月に息子さんは逝去されました）。

また、同じ頃からご両親が目立って衰えてきたので、片道車で約 2 時間、列車乗り継ぎの場合は 5 時間ほどかけて、看病や介護に通っていました。昨年、近くの介護施設に引き取りましたが、お父さんは最近亡くなられて、今は 2 日に 1 回程度お母さんの様子を見に行っています。

今後について、他の役職はともかく、男女共同参画センター館長は、最初は飾りみたいだったが、1 年経ってやっと見えてきたこともあり、まだやるべきことがあると思うので、もう 1 期はやろうかと思っているそうです。今までの経験、専門を生かす点で、この仕事が現

在の彼女の中では柱になっています。

I・Iさんは、その他、女性行政・農林漁業・青少年育成・都市計画、福祉関係など、在職中からも多くの審議会の委員を務めていました。話を聞いていると、どれも女性の地位向上に関する視点が、彼女の一貫した姿勢だったことがうかがえました。たとえば、農林漁業でも女性は大きな役割を果たしているのに、地位は低く、決定の場にはいない。農業者の年金には、実際には農業を担っていても、自分の農地を所有していない女性はいれなかったことなど、多くの問題点を語ってくれました。

将来の夢

これからの生活については、「退職後6年目だが、自分の中ではまだ定年の線が引けていない。72かもっと先か。県の男女共同参画センター館長の次の任期の終わりには71になる。家裁も70が定年。5年後、仕事は無くなっていると思うけど、何をしているか想像できない」と言います。お母さんの介護、息子さんの病気もあり、自由な時間が持てず、先の計画が立てにくいせいもあります。

忙しい毎日ですが、始めてから3年目になるピアノの練習は欠かしません。短歌は10年選手で、年1回さまざまな地方で開かれる大会も旅行を兼ねて楽しみでした。しかし入会していた全国組織が、指導者がなくなって解散したので、全国大会も掲載誌も無くなり、今は途切れています。せっかく続けてきたので、他の組織に入ろうかどうしようか考えているところです。1昨年からは、NHKの短歌大会に投稿して去年は入賞し、東京の渋谷に行きました。これから新しく始めるとしたら、何か身体を動かすことをしたいと言います。

「旅行も好きだけど、母と息子のことがあるので今はのんびり出来ない、在職中は出張のついでに足を伸ばすなど、1人旅も慣れているのでいずれ行ってみたい、外国に3ヶ月ぐらい滞在してみるのもいいかな」と思っています。

一般に、学生時代の友人とは、卒業後いつしか音信が途切れがちですが、I・Iさんの場合はずっと交流が続いています。学部では専攻学科の学生は女性が12人と少数だったので仲が良く、卒業後もノート回して、今に至るまで様子は大体分かっているのです。ノートは半年に1回ぐらいの間隔で回ってくるそうです。今年も、11月の母校のホームカミングデーの前後に集まってどこかへ行きましょうという話が出ています。ただし、I・Iさん自身は、今は気分的にその余裕が無いとのことでした。

これから退職する人へのアドバイスをお願いしたところ、「将来、家族以外の人たちと共同生活する可能性、価値観の違う人や性格の合わない人たちとの共同生活が待っている可能性は大きいので、その覚悟をしておくことと、柔軟な思考力とコミュニケーション力を養っておきたい」とのことでした。私たちインタビュアーの考えはその段階までは及んでいなかったため、ご両親の介護の経験を踏まえたこの発言には、ハッとさせられました。

厳しい家庭環境の中で、今は将来のビジョンが描けないと言うI・Iさんですが、長年の趣味や卒業以来保ち続けている友人との交流など、気分的・時間的に余裕が出来たら実現させられる、さまざまな夢の種を育てているのではないかと、感じました。

(2011年8月インタビュー 文責 横田)



自由気ままな時間を満喫する --- Y・Yさん

Y・Yさんは、中国地方の国立大学を2008年3月に退職し、現在67歳、2人の子供はそれぞれ独立して、夫と2人暮らしです。専門は国際金融論で、長いオーバードクター生活を経て、就職したのは37歳の時でした。夫の勤務地とは遠く離れていたため、彼女が3歳と6歳の2人の子供を連れて赴任し、夫との別居生活は退職時まで27年間続きました。在職中は管理職も務めました。就任時は、ちょうど、国立大学が法人化され大学の管理運営が教員の手に委ねられ始めた時で、忙しさとストレスのせいか、自律神経失調や不眠にも悩まされたといいます。

好きなことをして暮らす

Y・Yさんは、退職後の生活について、それまでの職業生活の延長上ではなく、まったく新しい別の人生を一からはじめようと考えました。研究者・大学教員という職業は好きで志し、苦勞の末にやっとなったもので、自分なりに精一杯懸命にやってきたつもりですが、退職後は、生活の場を遠くへ移すこともあって、それまでの社会的役割からは離れ、どこにも属さない無所属の人間として、今まで切り捨ててきたこと、やってみたかったことを、心の赴くままに自由にやる暮らしをしてみようと考えたのです。勤務年限が短いため年金は少なく、経済的には豊かとは言えませんが、時間的、精神的には、今まで経験したことのない「贅沢」だといいます。子供の時から夢だった1日中好きなだけ本を読むことはもちろん、春のお花見や秋の紅葉狩り、夫や友人と古寺・旧跡を訪ね、海外旅行もして、今の彼女は生活を目一杯楽しんでいるようです。在職中に友人に誘われて2、3度やったことのある連歌も、教室に通って勉強し始めました。日本独特の短詩である連歌の魅力は奥深く、長年教える側だったので、学生として教わる側に座るのは新鮮な経験だといいます。地域の九条の会にも参加し、在職中は忙しくてあまり行けなかった集会や講演会などにも出られるようになりました。さらに、彼女の場合は、別の意味でも新しい生活が始まっています。それは、長く住んでいた住まいを離れて夫のいる土地に移り住んだことです。大学の教員は、夫婦で同じ地域に就職できることは少なく、やむを得ず別居している人も多いのですが、彼女の場合も、職を得てから退職するまでずっと別居でした。退職と同時に、京都市内で夫と同居の普通の生活が始まりました。

27年間の別居生活と新しい暮らし

退職と同時に起こったこの生活環境の激変には、戸惑うこともあったようです。彼女が移ってきたのは、30年近く単身生活をしてきた夫が作った生活空間です。そのような場合、確立された生活環境に、後から加わった者は相応のストレスを感じるであろうことは、容易に想像できます。加うるに、都心のマンション暮らしで彼女の居室も狭く、地方都市郊外の家でゆったりと暮らしてきた身には、すぐには適応するのが難しい環境だったことでしょう。彼女は、その軋轢から逃れるため、時々、旧居に息抜きに帰ってバランスを保っています。その地の緑豊かな自然、かつての職場や近所の友人たちとの食事や温泉巡りにも捨てがたい魅力があり、当分はこの2拠点生活を続けようと考えています。これは、何十年も別居生活をしてきた人たちへの、一つの参考になるかもしれません。

このような問題が予想されたにもかかわらず、自然豊かな地方の戸建て住宅での同居では

なく、大都市のマンションでの同居という選択をしたのは、一つには、彼女（と夫）の考える老後の生活スタイルによるものです。歩いても行ける距離に大型書店や図書館・美術館などがあり、風情のある商店街や大きな公園、川沿いの散歩道も近く、市内には全国から観光客が押し寄せる名所・旧跡が目白押し、という生活環境は、高齢化しても活発で多彩な楽しみや活動を求める彼女の希望にかなった立地だったようです。選択のもう一つの要因は、友人たちの存在でした。院生・オーバードクター時代を過ごし、結婚して子育てと研究の両立に苦闘したこの地は、彼女にとって多くの友人を得た地でもあり、大学や地域、子供の通う保育園での友人など、多様な友人たちが多く住む土地という要素は大きかったと言います。定年まで働いた男性退職者の多くは、職場以外での友人関係を維持したり新たに作り上げたりする機会や余裕がなく、退職後、家族以外に共に過ごす人がいないという悩みを持つことも多いと聞きますが、女性研究者にとっても退職後の友人関係は重要な問題かもしれません。今まで時間もなく、距離的にも遠く離れて、十分に付き合えなかった友人たちとゆっくり付き会えるようになったことも、退職後の大きなメリットだと彼女は言います。これらの友人たちは、古寺巡りや食べ歩きの良い仲間であるだけでなく、様々な地域情報を教えてくれたり、市民活動への窓口、新たな人間関係を広げたりするきっかけにもなっているとのことでした。退職後の人間関係を豊かにするためには、昔の友人との関係を築き直すこともやってみてはどうか、とY・Yさんは話していました。

2 年が経って

最近始めようとしているのは、友人に誘われた、定年後の女性研究者の暮らしぶりについてのインタビュー調査です。定年まで勤める女性研究者が層として一定数存在するようになった世代なので、個人的に知っている人に協力を依頼して、まずは定年後の女性大学教員の生活について、調査をする予定だとのこと。図書館に通って外国での調査例やインタビューの手法などを調べたりして準備を始めた所です。興味や関心を持ったことを、時間を気にせず追求できるのは、これも退職者ならではの楽しみかもしれません。

心の赴くままに生きる生活は、彼女にとって、在職時のストレスや体調不良を解消するには特効薬となりましたが、最近、2年間での体力の衰えが顕著になってきました。そのため、スポーツジムへの申し込みもしましたが、なかなか定期的に行けない状態が続いています。

今の所は、読書三昧の時間やコンサート、美術館、名所旧跡めぐり、古い友人たちとの旧交を温めたりする毎日を楽しんで、満足していますが、新しい自分を発見する、大学教員・研究者という役割から離れた第2の人生をどのようなものにするのかは、実はまだ模索中と言った方が良いでしょう。研究や教育というこれまでの仕事を通じる以外の社会とのつながりをどう作っていくのかが、現在の最大の課題ですが、九条の会などの市民運動にも参加しながら、自分のペースでゆっくりやっていくつもりですと、Y・Yさんは語ってくれました。

(2010年12月インタビュー 文責 登谷)



手織物もパソコンを駆使して楽しむ --- M・Tさん

M・Tさんは、現在 67 歳、2010 年 3 月、関西地方の国立大学を退職しました。勤務期間は専任教員 26 年と特任教授 4 年の計 30 年でした。大学院博士課程を修了して職を得た順調な人と比較すると、少し勤務年数が少ないのですが、それは、1970 年代始め頃より始まった研究職への就職難の時代を、数年非常勤講師として過ごしたからです。専門は理論物理学ですが、定年より半年早く講師の職を辞して、4 年間、大学の新設のセンター特任教授として、その立ち上げに尽力しました。彼女の退職後の生活はまだ始まったばかりで、現在は在任中の仕事にかかわる原稿執筆なども、少し残っている状況だということです。

退職後の女性研究者はどんな生活をしているのか？

M・Tさんの平均的な一日は、まだ、在職中の習慣から抜け出せず、メールチェック、次いで在任中に残ってしまった原稿書きなど、午前中はパソコンに向かって作業をしています。午後は、在職中はほとんどしなかった外歩き、新しく習い始めたピアノや手織物をするなど、比較的自由に過ごそうと計画しているのですが、午前中の仕事を午後まで引きずっていることが多い毎日です。夕食は 8 時ごろから晩酌を楽しみながら、在職中には味わえなかった開放感を感じています。残った原稿も書き上げ、さて、女性研究者の統計データの整理をしようと考えている矢先に、別の原稿を依頼されたり、在職中にしていた仕事の仲間からヘルプを要請されたりして、なかなか主体性のある生活ができていないと嘆いています。

彼女は、在職中から大学の女性教員の退職後の生き方に興味を持って、他の人はどんな生き方をしているのだろうかとずっと思っていました。男性は定年後、他の大学に再雇用される場合が多いのですが、女性にはそのような道はまだ開かれていないのが現状です。特に、実験系の女性研究者は、退職後研究を続けたくても研究場所がない場合がほとんどで、そのような人たちは、第二の人生をどのように歩んでいるのか知りたいと思っていました。

平均寿命が延び、核家族になり、退職後の 20 年をどのように生きるかは男女ともに大きな課題となっています。この問題にも、女性研究者を切り口として迫っていったらいいなと思っているようです。

このテーマについては、在職中も調査のための研究費の申請などもしていましたが、残念ながら採択にはいたりませんでした。それで、退職後、今までの友達や知り合いにインタビュー調査をしようと思っていました。巷には、退職後の生き方に関する男性向けの出版物は多いのですが、大学の女性教員に関する出版物はありません。日本の女性研究者（博士課程も含む）の比率が 12%という状況では、退職者は、まだ、非常に少ないでしょうから、そんな出版物が見あたらないのは当然でしょう。今、友人と一緒に、準備を始めていて、まずは、文献調査やインタビューの仕方などを勉強しようと、図書館で資料探しを始めたそうです。

手織物から広がる趣味の世界

月 1 回の手織物教室は、まず、糸に慣れる所から始めていますが、購入した少し高度の織り機を早く使いこなしたいと思っています。在職中に情報科目を教えていた時、西陣などの昔の織り機（ジャガード織機）が、コンピュータのパンチカードのような板に穴をあけて模様を作ることを知って、織物に関心を持つようになり、いつかやってみたいと思っていたそうです。西陣織などを見せてくれる所には、昔の織物風景として、織機の上に人が上がってカードを扱っている絵などが展示されています。緯糸を通して模様ができあがっていく過程は、物作りに共通していると思うのですが、単調でもなかなか楽しいものです。

織物は、基本的には経糸と緯糸の組み合わせなので、パソコンを使って模様や色の組み合わせなどを試してみることができます。彼女の場合は織物に興味があると言うより、ソフトウェアを使っているいろいろな試すことに熱心なようです。

また、これまでは子育てと仕事で手一杯で、毎日の生活は、大学と自宅の往復に明け暮れていたもので、ほとんど行ったことのない京都の名所旧跡を訪れてみたいと思っています。上賀茂神社はこの間初めて行ってきましたが、岡崎のインクラインや宇治平等院など行ってみたい所はたくさんあり、ほとんど観光客気分です。色彩など織物にも参考になると思っています。

今後は海外へも行きたいと思っています。在職中は国際会議参加のためヨーロッパやアメリカへは行きましたが、アジアに行ったことがないので、韓国や中国へまず行こうかと計画しています。手織物との関連で、色の使い方やデザイン、色彩感覚などを見てきたいと思います。デザインや色彩感覚という点では北欧も心惹かれる所です。このように聞いてくると彼女の場合、退職後新たに始めた趣味の世界が、生活全般にかなり影響を及ぼしているという印象を受けます。

退職後の生活設計については、「在職中からきちんとした計画があったわけではありませんが、ピアノは習いたいなと思っていたので実現しています。しかし、年金の少なさを考えると、在職中から退職後の経済的なことは考えておかないと、やりたいこともやれないですね」と語っていました。

家族との過ごし方

彼女の家族は、次男が東京で就職、長男がこの春結婚して家を離れたため、夫との二人暮らしです。義母は、92歳で同居していますが、階下と階上で日常生活は別々です。義母は今のところ元気で毎日外出、友達も多く、自立しています。

夫は、彼女と同じ時に高校教師を退職しましたが、退職後も非常勤講師としてほとんど毎日出勤していることもあって、あまり一緒に行動することはありません。彼は地元出身で友人も多く、友達と一緒に畑仕事に精を出しています。

今後の生活で気になることは、実母と義母のことです。実母は現在89歳で、故郷で一人暮らし、近くにいる弟の家族や妹が頻繁に様子を見に行ってくれていますが、次第に記憶力が衰え、一人暮らしの不安を訴えることが多くなって、当面は、雪深い所なので冬だけケアハウスに入ることにしています。しかし、これからどういう生活をするか、考えなくてはならないと思います。今後は、二人の母の介護問題にかなり時間を取られるのではないかと考えています。年齢とともに自分の健康も不安定要素が増えてくるので、予想がつきにくくなっています。「老老介護」という言葉が身近なものに聞こえるようになりました、と苦笑していました。

(2010年10月インタビュー 文責 横田)



定年前にやめたから出来たこと --- I・Mさん

I・Mさんは、近畿地方で、国立大学の技官を25年間勤めた後、私立短大（後4年制大学に改組）に助教授として就任しましたが、15年後の2006年に教授で退職し、67歳の現在、退職後6年目に入りました。1男1女の子供たちは独立し、現在はまだ現役の夫との2人暮らしです。

退職直後の楽しい生活

勤務していた大学は定年3年前に退職しました。それは、大学経営の方針を認めがなくなった結果の選択でしたが、勤めていた職場は今でも好きで、元同僚たちと会うのも楽しみです。退職後1年目は、元職場の非常勤講師としてゼミ生の指導や継続中の科研費の研究をしてきました。さらに、勤務が無く自由になったので、内モンゴルの生活実態調査やデンマークでのDV関連の調査などへも共同研究者として参加できました。定年前に退職したことで、研究教育に対してはまだ現役気分で、かつ校務が無く研究教育時間が増えたと感激している感覚でした。しかし、一方では、定年後の希望だった田舎暮らしの準備をしようと、自動車の運転免許を取りに教習所に通いました。また、英会話スクールにも通い始めました。いずれも教えてもらうのは楽しく、先生になったり生徒になったり、この1年間の幸せ感は代えがたいものだったそうです。英会話スクールはその後倒産。それ以後は、英会話は止めたままです。

定年後の人生設計では、教育研究関係の資料は一切処分して、あたらしい生活をしたと思っていました。老後の人生で、本当にやりたいことは何かを考えると、研究より絵を描くことだろうかと思問自答しているそうですが、なかなか研究から離れられず回答はでていません。道具を購入したのに作品が1つでストップしているものに織物が有ります。いずれやりたいと思っています。あたらしい趣味としては陶芸を始めました。漠然と自分の作った食器で食事が出来たらうれしいと思っていたところ、新聞紙上で教室案内を見たので、即刻申し込みました。先生は著名な方ですがごくばらんな優しい方です。創作のイメージを言うとそれを活かした作り方を教えてもらえます。土も用意してあって身一つで行けばいいので簡単ですとにっこり。私たちがお話を伺った部屋にも、花瓶や大皿などの作品があちこちに飾られていました。

同窓会活動と留学生の研究指導

退職後1年で非常勤が終了し、元の職場の仕事とは縁が切れましたが、その後4年間は、内モンゴルやデンマークの海外調査に行く生活が続いていました。科研費の子どもの生活空間の研究については、若い研究者の分担した研究が素晴らしかったので、若い人のためと思い出版に取り組みました。同時に、その頃母校の同窓会の仕事に首をつっこむことになりました。本部役員になったのは退職2年目ですが、その年に大学創立百周年記念協賛事業として卒業生調査企画が立ち上がりました。千人余りの自由記述の多いアンケートをまとめるのは大変で、出版まで3年がかりの大仕事になりました。自宅から同窓会本部まで1時間かけて通う生活が、月に10日位になったこともあります。70代80代の元気な先輩の母校に寄せる思いは強く、役員会で出てくるアイディアとそのパワーには、励まされると共にについて行きかねるほどでしたが、将来の自分の老い姿の参考にもなりました。若い頃は同窓会をそれほど大切にも懐かしくも思いませんでしたが、全国に散らばる同窓生の繋がりには、今となっては価値ある財産だと思えます。現在は支部の役員ですが、そろそろ役員はおりたいと思っ

ています。支部では源氏物語を読む会に入れてもらい、講師の方のおかげでその面白さにはまってしまうしました。今では月 1 回の例会が待ち遠しいほどだそうです。

内モンゴルからの留学生の研究指導も退職後の得難い経験でした。友人から子供の生活空間の研究をしたい留学生を紹介されました。I・Mさん自身が、若い時行った内モンゴルの草原の素晴らしさに魅せられていたので、親近感を持ち、喜んで研究指導を引き受けました。留学生の進学先の指導教員の理解もあって、M1 から D3 でドクターを取得するまで、共同研究者として研究指導をしてきました。これも定年前に退職し余裕ができた賜物でした。

これからの暮らし

身の回りの整理を含め、人生のおしまい支度に早くとりかかり、それを楽しみたいと思っていますが、なかなかできないとのこと。健康のためにと退職 3 年目から気功をはじめました。また退職直後からソフトランディングのためと、専門学校や大学の非常勤講師を引き受けましたが、退職後の生活にも慣れ、そろそろこの仕事はもう不要かと思っています。

自分の研究テーマに照らして、子どもの生活圏を破壊するような学校統廃合は疑問だったので、約 20 年前「京都の学校統廃合を考える会」を立ち上げ、この問題に関わってきました。最近また、小中一貫校という名の大規模学校統合が推進されています。東京の小中一貫校の現場では、小学生の時から中学の内容を教える前倒しの詰め込み教育、生徒の急増による教室の不足、報告制度による教員の孤立と締め付けなど、子供も教師もへとへとになっている現状です。子供にとって望ましくないこの動きを、父母や教師はなぜ反対しないのか、そろそろ研究から足を洗うつもりだったのに、追求してみたいとも思うようになったといいます。

京都市が計画している岡崎公園付近の街づくり計画にも、近所でもあり地元住民としては関わらざるを得ないと思っています。その他にも、留学生同士の交流を助けたり、悩みを聞いたり、退職後の友人たちがゆっくりできるようなカフェ・たまり場も作りたい、健康維持のための気功も続けたいし、友人たちとあちこち出かけるのも楽しみと、やりたいことは沢山あります。

これから退職する人へアドバイスをするのであれば、「何事もできる範囲で」を見極め無理しないことでしょうか（老いると無理はあとから体に触りができることを体験しました）。ご自身は、退職後は、日々の生活を味わうをモットーに、散歩を楽しみ、家族と会う機会を大切に、遊びの誘いは断らず、やりたかったことはすべてやってみようと思ってちょっとなんて思っています、とのことでした。

朝起きて、出かけない時はゆっくり新聞を複数紙読む、土日は新聞のクイズを解くのが楽しみ、テレビも映画も大好きだけど、それを見たらのめりこみそうで、今は、時間があるなあと思ってゆったり暮らしていきたいので、あまり見ないようにしている、10 年以上前から飼っているネコと戯れる時間もやっとできて、ネコが何を考えているか想像するのも楽しい、と語る I・Mさんですが、まだまだ家でただのんびりとはいかないようです。

(2011 年 4 月インタビュー 文責 横田)



ソフトランディングする --- H・Yさん

H・Yさんは、近畿地方にある国立大学に41年間在職し、2007年に定年退職しました。現在67歳、退職後4年7ヶ月たっています。男女二人の子どもはそれぞれ家庭を持って家を出、現在は、まだ現職のパートナーと二人の生活です。

退職後はソフトランディング

「在職中は、大学の移転や法人化の影響で、職場が遠くなり雑用も年々増えて忙しくなり、定年まで勤めるのが精一杯で、退職したらどんなに楽かなと思っていました。退職しても1年くらいはあまり体調がよくなかったのですが、だんだんよくなりました。在職中、オゾンの研究をしていたことや、化学の出身であることも幸いして、オゾン協会がNEDO（新エネルギー・産業技術総合開発機構）から研究費を得て、濃度分析法のJIS規格を作るための委員会を立ち上げた際、非常勤研究員の身分で委員に加わることができました。私の研究室の先生がオゾン協会の会長なので、元の研究室へ最初の年は週2回くらい行きましたが、だんだん少なくなって4年で委員も解任になりました。いわば、4年かけて徐々に退職したようなもので、ソフトランディングができてよかったと思っています」とH・Yさんは述べていました。しかし、これで完全に研究に関係した仕事と縁が切れたわけではありません。というのは、「退職した男性研究者も、たぶんそれまで行ってきた研究を生かして何かしたいと思うらしく、彼らは関西オゾン利用研究会を立ち上げてこれから活動をしていくようです、それで、私にもお誘いがあり加わっています」と、付け加えたからです。

また、環境工学分野にいたので、関西の各地方自治体の環境審議会委員や環境影響評価審査会委員等を依頼され、最多の頃よりは数が減ったが、現在でも委員を務めているとのことでした。これは、政府の男女共同参画社会基本法による女性の積極的登用と、工学分野には女性が少ないことが相まった結果だと、H・Yさんは分析していました。

趣味多き活動屋さん・ボランティアも

「在職中はパソコンをよく使っていたので、肩こりが常態になっていました。男性はゴルフをやって肩こりを解消しているというのを聞いて、太鼓を打つのも同じだと思って、退職後すぐに和太鼓教室を探してシニアのクラスに入りました。そのクラスは、60歳台から最高齢80歳の人が入って全体で13人です。月3回の練習で、曲目もシニア向けにアレンジしており、半年で一つの曲をしあげ発表会があります。たとえば“百花繚乱”とか“鞍馬の火祭”、“三宅太鼓”などを今までやりました。汗をかき、ストレス発散になります。参加者同士も仲がよくて、家でとれた野菜などのおすそわけをして貰ったりしています。

もう一つ、在職中から考えていた習い事に謡があります。これは、もし、一人暮らしになったら、声を出すのはボケ防止になるかなと思って月2回習っています。なかなか上達しませんが、楽しく通っています。いろいろやってみて、自分に合っているものが残っていくと思っています。

他には、地域に何か貢献しないといけないと思って、ボランティア活動をしています。年をとっても自立して暮らせることを目的にした、ステッププラスという新しい転倒予防運動があるのですが、そのサポーター養成の講習会を、地域医療研究センターと左京区地域介護予防推進センターが共催で開いています。そこでサポーターの資格を取り、地域の老人クラブで体操の指導をしています。

また、独居老人を訪問する活動も月1回しています。これは2年ほど続いていてこの3月

で終わります。これらの活動は、一種の社会勉強だと思っています」とその活動は多彩です。

太鼓に謡、ボランティア活動と忙しい H・Y さんですが、まだまだ続きます。「若い頃から洋裁が好きで、いろいろ作っています。最近では、今年の夏は暑かったのでキュロットを作りました。さらに、織物もしたい、ピアノも習いたいと思っています。織物は、友達と一緒にやろうとって小さな機を買ったのですが、家の中で機を広げる場所がなくてやっていません」。

加えて、おばあちゃんの役目もきちんと果たしています。娘さんが病院勤めで月 5 回の夜勤があるので、その 1 回はお孫さんの面倒を見るために出かけて行って、1 泊して帰ってくるそうです。

毎日の情景

H・Y さんの日常の暮らしは、毎日 6 時半に起床して仕事に行く夫の朝食を作ります。それから、掃除、洗濯など家事をします。出かける時は 9 時に家を出ます。夕方 5 時には食事の支度をして 6 時半には夕食です。買物は生協の共同購入をしているので、買い物に時間を使うことはあまりありません。夜は比較的早く就寝します、という風でした。

H・Y さんは、パートナーについて「夫は、共稼ぎの昔から家事は一切しませんでした。職場が忙しく、仕事人間なので、土日でも職場にでかけることが多い人ですが、家族で旅行をしたり、ハイキングに行ったり、海外旅行に行ったりということは、率先してやります。今年は海外旅行に 3 回行きました。毎年 2、3 回は海外旅行をしています。そのせいで貯金はできませんが、視野が広がります」と語っています。これを伺って、家事は妻、家族の団らんのための企画・実行は夫、という役割分担もなかなかいいなと感心しました。

また、「健康のために、スポーツジムへ夫と一緒に通って、筋トレとウォーキングをしています。夫は仕事の都合で余り時間がとれませんが、週 1 回は行くことにしています。」となかなかの二人三脚ぶりです。

彼女の日常は、規則正しい健康に留意した毎日、その上、各種の委員会、ボランティア活動、老後を視野に入れた多彩な趣味、パートナーとの団らんと、理想的な生活をしていると脱帽しました。

退職後の生活設計へのアドバイス

在職中は年金のことなど考えなかったが、退職してその額の少なさに驚いたと言っていたが、これには聞き手の二人も同感でした。「これから年金の額は、増えることはなく減る一方だと予測されるので、今後退職する人は、在職中から経済的な面での生活設計を、きちんと考えておかないといけないと思います。精神的には、退職後も何か社会と繋がりがある仕事をし、趣味も教えられるくらいに力をつける、といった人生設計を考えておくべきです」と先人としての思いを進言していました。

(2011 年 10 月インタビュー 文責 登谷)



友達と一緒に楽しむ --- K・Kさん

K・Kさんは、インタビュー時点で 67 歳、41 年間勤務した近畿地方の私立大学を退職して、3 年が経過しようとしていました。しかし、最初の 2 年間は元の大学から非常勤講師を依頼されたので、退職に向けては比較的ソフトランディングでした。専門は食品分析化学（実験）です。

現在は、夫と娘と猫 4 匹の 3 人暮らしです。インタビューに伺ったときも 8 キロもある大きな猫がずっと同席していました。

6 年早い退職

彼女は、定年の 6 年前に退職しました。その理由を次のように語っています。「最近では私立大学の定年も早くなる傾向にあります。十数年前までは多くの大学で 70 歳が定年でした。私の大学も同様でしたが、同僚の教員の中には、65 歳を過ぎるあたりから思考の柔軟性に欠ける人が多く、若い世代は先輩なので強いこともいえず、そのことは大学にとっても学生にとってもよくないという例を数多く見てきましたので、私は 65 歳で退職すると早くから決めていました。その上、大学もだんだん変わってきて、他の大学と同様に大学院を設置することを決め、そのために私は文科省へ何回も説明に行ったりして、非常に忙しくなっていました。その他にも、私学は秋頃から何回も入試を行うので、日常の研究・教育業務に加えて、事務的な仕事に多くの時間を費やさなければならなくなって、研究時間も取れず、職場が全然楽しくなくなってきました。それで、自分で予定していた年齢よりも 1 年早く 64 歳で退職しました。おまけに、大学は 65 歳過ぎた人に対して、昇級はほとんど無く、また、特任として採用などということを検討し始めて、最近では私同様、定年以前に退職する人が多い状況です。」

旅行三昧の 1 年

退職した年の夏頃から、それまで一人で暮らしていた父が、独立した生活をするのが困難になり、私の家のすぐ近くに連れてきました。そこへ毎日私が介護に通うという生活を 1 年以上続けていましたが、翌年の 8 月に亡くなりました。それで気分的に解放感を得たのでしょうか、その後の一年間はいろいろなところへ旅行しました。

最初、10 月に友達に誘われて、中国の西安へ兵馬俑を見に行きました。今でも発掘は続けられているのですが、等身大の兵俑の顔が全部違っているようで、そのスケールとエネルギーに圧倒されました。翌年の 2 月には、ハワイへ、父の看護でお葬式に参列できなかった義理の甥の墓参りをすませました。それから、夫も一緒に、台湾へ、夏にはキューバへ行きました。キューバへの旅行は、2 週間と他の数日の旅行に比べて少し長かったのですが、キューバに詳しく何度も訪れている人が案内役で、普通の観光旅行とは違ってとても有意義な旅行でした。

その間、北海道、北陸、東北へ行き、本当に落ち着く暇がない毎日でした。東北へはこれも友達と 4 人で 9 月に行ったのですが、3 月の東日本大震災の後だったので、物見遊山的に観光に行くのは不謹慎かと迷ったのですが、人とお金が行くことで東北地方の活性化に繋がると考えて決行しました。結果的には、東北のみなさんがいろいろなことを話してくださって、行かなければわからないことを知りとてもよかったと思いました。

秋以降は、しばらくおとなしくしていようと思っていたのですが、友達が次の旅行計画に誘ってくれているので、また、出かけそうです。

月 1 回の読書会

現在一番楽しみにしていることのひとつに、数人の友達と一緒に月 1 回開いている読書会があります。最初は、友達に関わっていた読書会に参加したのがきっかけです。その人達はどちらかというと市民運動的なことを中心に活動していて、この集まりのきっかけは、辺見庸を呼ぶ会を企画したことでした。その中の一部の京都の人たちが読書会を持とうということになって、6、7 人で出発しました。私は 2 年ちょっと参加しています。1 回 1 冊の本を取り上げて議論しています。本の種類や内容は、参加者が思いつきでその時々で決めています、どちらかというと、社会の問題を勉強することを目的とした読み物が多い傾向にあります。でも、小説なんかも読んでいます。最近取り上げた本は、池澤夏樹『春を恨んだりはしない』および山本義隆『福島原発事故をめぐって』です。

仕事をしているときは、自分の関連の本しか読めませんでしたが、本を読むこと自体は好きなので、現在はいろんな種類の本を楽しんでいます。この会では原発の事故について、youtube で集めた原発関連の映像の DVD を一緒に見たりもしています。また、私がキューバに旅行をしたときは、訪ねた先で撮った写真を中心に、社会主義国キューバの歴史や現状の問題など、少し勉強したことも加えて、パワーポイントで作成したファイルを見てもらったりもしました。

お寺巡りの集まり

もう一つの私の楽しみは、京都の名所旧跡で歴史を学ぶ会に参加することです。この会では、京都の歴史や神社仏閣のことをよく知っている人の案内で、毎月 1 回散歩と称して、京都のお寺巡りや美術館、博物館巡りを数人でしています。案内してくれる人は私と同じ分野でしたが、今は専門から離れて歴史に深い関心を寄せ、非常に博識で、いろいろなところへ行って説明をしてくれます。メンバーのうちの他の一人も、同じように化学分野の研究者であった女性ですが、この人も大学退職後専門を離れて、シニアの考古学教室に通い今年で 3 年目になります。考古学に熱中しておられ、今までほとんど関心をもっていなかった分野のことが聞けて、毎回楽しい時間を過ごしています。

友達は大変

K・Kさんは退職を機に、今までの仕事とは関係のない生活を、百パーセント満喫しているようでした。大学教員の退職後の生き方として二種類あると考えられます。一つは、退職までの経験を生かした生き方、もう一つは、退職前とは全く違った生活を送る生き方です。K・Kさんの生き方は後者に属すると考えられますが、誰にでもできることではないと、インタビューアは深く感じました。それは、これまでの会話の中にもキーワードとして出てきていますが、“友達”の存在です。大学教員は、普通、中高時代の友人とは遠く離れた土地で生活を始め、職業柄、仕事に熱中して、友達づきあいが疎遠になる人が多い中で、彼女は、京都に生まれ育ち、仕事をしてきたという希少な生育環境も幸いしているのですが、自身でも「意識的に友達づきあいを大事にしてきた」と述べています。このことは、退職後の生活のスタイルを決める大きな要素になっているように思われます。

(2012 年 1 月インタビュー 文責 登谷)



おわりに

女性研究者は、定年退職後どんな生活をしているのだろうか、という疑問から始まったこの調査は、開始から２年半もかかってしまいました。インタビュー時とは、状況が変わっている方もあるかと思います。調査にご協力いただいた方々には、お礼とともにお詫びを申し上げます。また、読者の方には、調査時点での状況ということでお読みくださるようお願いします。

調査の対象者は、私たちの個人的知り合いという極めて限られた範囲ですが、私たちの就職時は、まだ女性研究者の数が少なかったこともあって、京都婦人研究者連絡会を始め、さまざまな分野横断的つながりがあり、専門分野は多岐にわたっています。できるだけご自宅に伺ってインタビューしたいという方針から、関西在住者が大半となりました。年齢は82歳から67歳(調査時点)、定年後の経過年数は2年から12年と多様です。また、退職後の収入は、公的年金・個人年金・その他を合わせて20～30万円がほとんどで、当時の厳しい就職環境のため、就職年齢が高くその結果として在職年数が短かく、昇格が難しかったことなどを反映して、公的年金が驚くほど少ないことを何人もの方が指摘されています。

インタビュー全体を通じて、強く印象に残ったのは、各人各様に皆さんが、多彩で個性的な退職後のライフスタイルを作り上げているということでした。大まかにタイプ分けするなら、現職時の研究を続ける、研究に関連した普及活動や助言、研究者運動を行うなど、専門と何らかの形で繋がるタイプと、それまでの研究分野とは全くちがう分野での活動、趣味や交友関係、市民運動などに重点を置いているタイプに分かれるようです。しかし、いづれにしても、研究を含めそれまでの人生で得られた経験や蓄積をもとに、退職後の生活が意欲的に築き上げられていて、その背後には努力と意志の力があることを感じました。これから退職する方へのアドバイスも、あ、そうだったと気づかされることの多いものでした。

最後に、個人的なことですが、先述のように、インタビューに応じていただいた方は、若い時からお付き合いのあった方が多かったのですが、まとまってお話を伺うと、そんな趣味があったのか、こんな方だったのかと、新たな発見があり、人間の多面性と人間関係の豊かな可能性を知ることができたのは、私にとって予想外の収穫でした。また、初めてお会いする方も、お話を伺いながら、内心、分かる分かる、私も同じ経験をしたなどと思うことが多く、職場も専門も違っていても同時代を研究者として生きた者として、勝手に仲間意識を持つことができたことも楽しい経験でした。ご協力いただいた皆さんに、もう一度心よりお礼を申し上げます。そして、お読みいただいた方には、実用的にでも精神的にでも、何か心に残ることがあるようお願いしています。

2013年 9月

横田綏子

調査協力をお願い

趣旨

定年退職後をどう過ごすかは、男女とも平均寿命が延び、家族形態が変化した現代社会の一つの課題だと考えられます。平均寿命は、平成 21 年現在で、男性 80 歳、女性 86 歳ですが、毎年伸び続けています。

大学教員は、多くの場合国立で 65 歳、私立で 70 歳が定年ですが、女性の場合、平均寿命まで生きると仮定すれば、退職後の生活は約 15 年～20 年あります。先輩の女性研究者の方々は、退職後どのような暮らしをしていらっしゃるのか、自分に合った生き方をどのようにして見つけられたか、また、何が大事と考えておられるかなどは、後に続く後輩女性研究者の大きな関心事となっています。

ちなみに、退職後の生き方に関する本は多く出版されていますが、その対象はほとんど男性です。女性の退職者を対象に書かれた本は、まだ少なく、特に、大学教員・研究職に就いていた人については、現時点では見あたりません。また、研究者の場合は、専門によっても退職後の過ごし方が異なってくることも予想されます。

私たちは、大学を退職された女性教員に的を絞って、上記に述べたことをいろんな分野の人へのインタビュー調査を通して探ってみたいと考えました。それは、これから退職する人たちにとって貴重な資料となると確信します。

調査の方法と結果の公表方針

調査は、簡単な紙面での事前アンケートと、我々兩名による個別インタビューで行います。インタビューの内容は、私たちが記録を起こして文章化し、ご本人に見ていただいて、加筆修正を行い、ご本人の了解を得た上で、何らかの形にまとめて公表する予定です。出版が困難であれば、電子ブックにして興味のある人たちに広く読んでいただくことも考えています。

つきましては、上記の趣旨にご賛同いただき、是非とも、調査にご協力いただきたく、同封の同意書にサインの上、お引き受けいただくようお願いいたします。

2011 年 3 月 4 日

横田 綏子（元島根大学法文学部）
登谷 美穂子（元京都大学理学研究科）

同 意 書

私は「調査協力をお願い」を読んだ上で、調査に協力することに同意します。

年 月 日

住所 _____

氏名 _____

事前アンケート

(記入日 年 月 日)

ふりがな

氏名： 生年： 年生

職歴（含むポスト、概略で結構です。）

年～	年	
年～	年	
年～	年	
年～	年	
年～	年	

研究分野

☐人文科学系 ☐社会科学系 ☐自然科学系（☐理論 or ☐実験）☐医歯薬系

（少し詳しく ）

家族構成（複数選択可）

☐単身 ☐夫婦 ☐子どもと同居 ☐親と同居 ☐親・子と同居 ☐その他

収入

収入源：☐公的年金 ☐個人年金 ☐その他（ ）

収入月額：☐10万円未満 ☐10～20万円未満 ☐20～30万円未満 ☐30万円以上

居住地

☐市街地 ☐郊外 ☐町村 ☐その他（ ）

退職後の仕事

仕事の有無：☐有り ☐無し

職種：☐非常勤講師 ☐理事・役員・顧問 ☐コンサルタント ☐起業 ☐その他

継続年数：☐1年 ☐2～3年 ☐4年～5年 ☐6年以上

退職後の主な活動（複数回答可）

☐研究 ☐教育 ☐ボランティア ☐地域活動 ☐社会活動

☐趣味（ ） ☐介護 ☐孫の世話 ☐家事

☐友人との交流 ☐特に決まったことは無い ☐その他（ ）

退職後の主な健康・精神状態

健康：☐よい ☐持病がある ☐悪い ☐その他

気分：☐とてもよい ☐楽しい ☐普通 ☐憂鬱感がある ☐喪失感がある

☐イライラする ☐やる気が出ない ☐その他

退職後の健康の維持

☐スポーツジムなどに通っている ☐散歩など自分で運動をしている

☐特に気をつけていない ☐その他（ ）

退職後の生活設計をたてた時期

☐退職前から準備 ☐退職後考えた ☐特に考えていなかった ☐その他

退職後の楽しみ

☐研究 ☐教育 ☐趣味 ☐家族との交流 ☐友人との交流 ☐特に無し

☐その他（ ）

以上です。ご協力ありがとうございました。

編者紹介

登谷 美穂子（とや・みほこ）

1943 年生まれ。広島大学大学院理学研究科博士課程修了、理学博士。

京都大学理学研究科講師を経て、同女性研究者支援センター特任教授を 2010 年に退職。

横田 綏子（よこた・やすこ）

1943 年生まれ。京都大学経済学研究科博士課程単位修得。

島根大学法文学部助教授を経て、同教授を 2008 年に定年退職。

発 行 者

登谷 美穂子 m-toya(at)kdp.biglobe.ne.jp

横田 綏子 h.y.yasuko(at)nifty.com